

平成 24・25 年度  
川崎市社会教育委員会議研究報告書

# 「現代の若者と地域社会のつながり」

—川崎の社会教育は何ができるか—

平成 26 年（2014 年）3 月

川崎市社会教育委員会議

<b>I 課題設定の理由・背景</b> . . . . .	<b>1</b>
1. 現代社会における「若者」たち	
2. 現代の若者と川崎の社会教育	
3. 今期研究の趣旨及び手法	
<b>II 事例を通して検討する</b> . . . . .	<b>3</b>
<b>II-1 課題を抱える若者が社会とのつながりを見つけるために</b> . . . . .	<b>4</b>
1. 「課題を抱える若者」の現状と課題	
2. 事例研究報告	
中原図書館における川崎市精神保健福祉センターとの連携の取組み	
・事業内容紹介	
・ヒアリング内容	
3. まとめ	
<b>II-2 若者の力をより活かすために</b> . . . . .	<b>13</b>
1. 若者にとっての地域とは	
2. 事例研究報告	
(1) 子ども会連盟「ジュニアリーダー研修」	
(2) 宮前市民館「こどもあそびランド」	
(3) 大学生による地域貢献	
3. まとめ	
<b>II-3 若者の生きる力を育み、若者が生きやすい社会にするために</b> . . . . .	<b>25</b>
1. 今日の若者の育ちと地域（社会）教育活動	
2. 事例研究報告	
(1) 臨港中学校区地域教育会議「職業体験」受け入れ事業所	
(2) 若者の心に届く腹話術の実践	
(3) 菅生こども文化センター「わんぱく生活学校」	
3. まとめ	
<b>III 全体のまとめと提言</b> . . . . .	<b>31</b>
<b>IV 資料</b> . . . . .	<b>34</b>
1. 補足資料	
2. 平成 24・25 年度社会教育委員名簿	
3. 審議等経過	

# I 課題設定の理由・背景

## 1. 現代社会における「若者」たち

社会は少子化にもかかわらず、日本の若者たちは様々な問題を抱えている。内閣府が発表した2013年版の「子ども・若者白書」によると、2012年における15歳～34歳の若年無業者（ニート）は63万人、同年代の人口に占める割合は2.3%で過去最高だったことが明らかになった。また、15歳～34歳の若年フリーターの数は180万人、同年代の人口に占める割合が6.6%になった。また、「自分の趣味に関する用事の時だけ外出し、普段は家にいる」という広義のひきこもりは69.6万人と推計された。

ニートの若者のうち、就業を希望しているにもかかわらず、求職活動をしていない理由は、15～19歳では「学校以外で進学や資格取得などの勉強をしている」と「病気・けがのため」が多く、20～24歳と25～29歳ではそれらに加え「知識・能力に自信がない」という回答が多い。内閣府はこの結果について、「社会での能力発揮を支援する対策が必要」と分析しており、若者たちに対して、雇用改善策のみならず、精神的なケアや社会とのつながりを支援する仕組み作りが必要だということが言える。

## 2. 現代の若者と川崎の社会教育

川崎市における青少年教育事業、なかでも青年を対象とした事業は青年学級振興法以前に文部省実験社会学級として開設されたのを端緒とする。教育文化会館・市民館・分館（以下、「市民館」）において職業青年学級、障がい者青年学級、青年リーダー養成のための青年学級などが展開され裾野を拡げてきた。さらに、1965年以降は青年学級振興法にとらわれない青年の自由な学習、交流の場として青年教室の開設も行われてきた。しかし、2000年代に入って市民館における青年を直接対象とした事業は減少し、2003年度には「青年」を冠する事業は姿を消してしまう。

そのような中、市民館の事業担当職員は2005年度には区役所生涯学習支援課（以下、「支援課」という。）職員を併任する体制となり、社会教育振興事業と区役所事業において区役所と市民館、それぞれの特色を活かした取組をおこなうことが期待されている。

さらに2010年度には「区行政改革」に基づく区役所機能の強化により市民館は市民協働のまちづくりを目指す区役所に移管され、区における生涯学習・市民活動を担う拠点として運営されることとなり、市民の学習を支え市民自治の主体を育てる教育機関として、地域社会の活性化に向けて各区の中でその機能を担うこととなった。

市民館の果たす役割は社会状況によって変化している。高度経済成長期の成人学級・青年学級、1970年代からは市民自治に関わる学習事業が盛んになったが、その後は子育て支援や高齢者社会参加事業、多文化交流などのほかに、市民参画による「企画委員会」方式が定着してきており、市民館・分館が実施する事業は、社会状況や時代の要請、地域性によって柔軟な組み立てが求められている。

現在の川崎市の市民館において、若者との直接的な結びつきは薄くなっていると言わざるを得ない。今回の課題と向き合うにあたって、市民館で行われている事業には青年を対象とした展開はほとんど見出すことができなかった。

一方、博物館や図書館という出会いや交流を直接の目的としない社会教育施設についてはどうか。個人利用が前提のこれらの社会教育施設の機能や役割について、このような視点から若者との関係が論じられることはあまり例がないと思われる。

ニートやひきこもりを含む青年を対象とした施策は福祉や就労支援がその主たる任を負うことが多いが、社会教育を通して生涯学習の観点からの何らかの取組や支援はできないか。若者のキャリア・生き方・あり方教育を社会教育において充実していくような場を設定し、必要に応じた出会いや学習の機会などを通じて、自己肯定感や自己有用感を認知・高揚させる取組みが求められるのではないだろうか。

### 3. 今期研究の趣旨及び手法

川崎市社会教育委員会議は、この「若者たち」に焦点をあて、「つながり」をキーワードに、「社会教育事業」並びに「社会教育施設」の在り方について検証を行うことにした。そのため、委員を3つのグループにわけ、第1グループは課題を抱えている若者が社会とのつながりをつけるために、社会教育施設や社会教育はどのような機能を発揮しているのかについて、第2グループは、若者の力を地域でさらに活かすために、社会教育もしくは施設はどのようなことが必要かについて、第3グループは、若者の力を育み、生きやすくするために市民と地域はどのような活動をするができるかについて、それぞれ事例を取り上げ検討し、考察を加えた。

この検討を踏まえ、若者たちが社会とのつながりを作るために、社会教育は何ができるのか、社会教育施設はどのような機能を持ち、または持たなければならないのかについて提言をしたいと考えている。

なお、「若者」や「若年層」を対象とした研究等では、おおむね「15歳から34歳」を「若者」としてとらえているものが多く、本稿においてもそれらの統計等に基づくことにする。

## Ⅱ 事例を通して検討する

### 1. 課題を抱える若者が社会とのつながりを見つけるために

「つながれない」「つながりたくない」若者を、課題を持つ若者と考え、地域あるいは人とつながれない、関われないことが課題と考えていくこととし、この課題に対して、社会教育施設・事業はどのように関わられるのかを考える。

### 2. 若者の力をよりいかにするために

現在、様々な活動をしている若者たちを対象に、その力をより活かしていくために社会教育事業や社会教育施設は何ができるのか、どうあるべきかを考える。

「若者の力を活用する」というテーマに基づき、社会教育に関わる活動で若者が活躍して成功している例を研究するとともに、若者の「活躍する場面」を捉え、社会教育の分野に限らず、例えば福祉やまちづくりに活躍する若者を社会教育が支援することはできないかという視点から、社会教育のあり方について検討する。

### 3. 若者の生きる力を育み、若者が生きやすい社会にするために

地域がどのように若者を育てていくのか、という視点から若者たちを取り巻く大人や地域環境、家庭環境・保護者を対象に社会教育事業や社会教育施設は何ができるのかについて考える。さらには、地域が若者に「無関心ではない」というメッセージを送るために何ができるのか、どうしたら若者に伝わるかについて検討する。

## Ⅱ－１ 課題を抱える若者が社会とのつながりを見つけるために

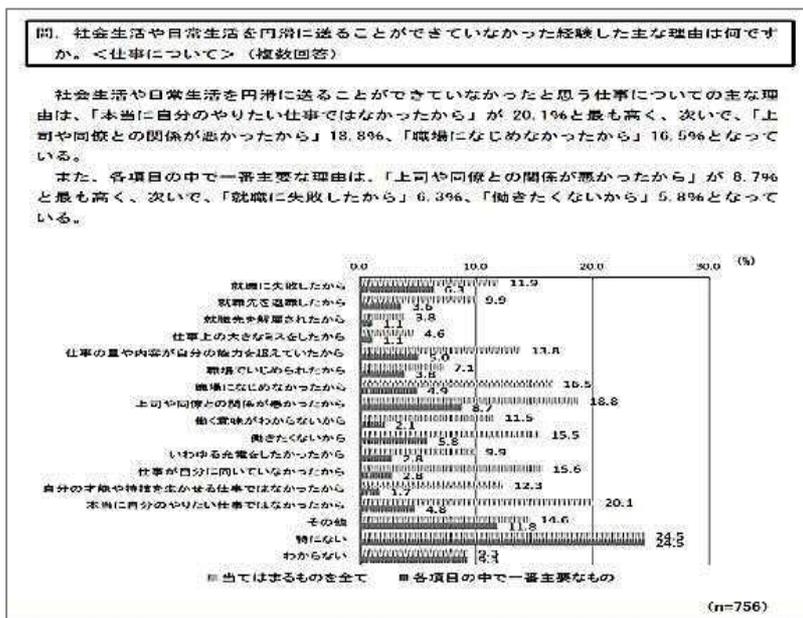
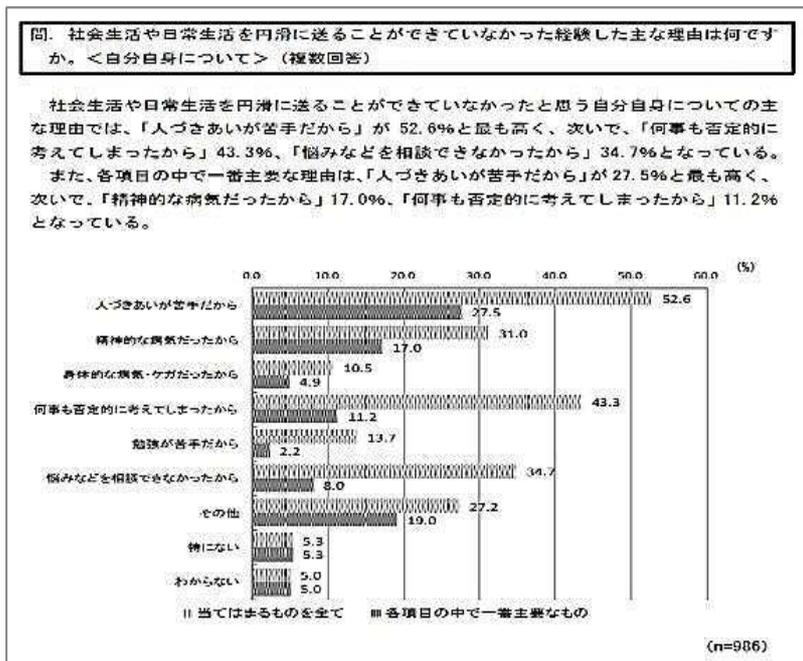
### 1. 「課題を抱える若者」の現状と課題

課題を抱える若者の傾向を内閣府「若者の考え方についての調査報告書（ニート、ひきこもり、不登校の子ども・若者の支援等に関する調査）」（H25.3）（資料34ページ以降参照）より考察するとともに、川崎市内の若者の傾向を川崎市「川崎市青少年意識調査」（H2～H22）（資料38ページ以降参照）より考えてみる。

「若者の考え方についての調査報告書」では、3,219サンプル中に日常を円滑に送ることができていなかった経験がある若者の割合は多く、自分自身についての主な理由として「人づきあいが苦手だから」「何事も否定的に考えてしまったから」、「悩みなどを相談できなかったから」と回答している。また、

仕事についての主な理由では、「本当に自分のやりたい仕事ではなかったから」や「上司や同僚との関係が悪かったから」「職場になじめなかったから」などが多く、仕事に関しては主体的な判断をおこなっており、自分自身についての主な理由の結果からうかがえる自己肯定感の欠如だけが、日常生活を円滑に送ることができない理由であるとは一概に言えない結果となっている。

また、自分には長所があると感じたり、うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む姿勢がうかがえるほか、「いつか必ず自分にふさわしい仕事が見つかると思う」が73.8%を占めるなど仕事についての意欲や将来に関する希望もうかがえる。



つまり、何らかの課題を抱える若者は主体的な判断と自己肯定感のある程度持ち合わせているが、実際にまわりの人間に対して意思表示をおこなう場合に、自分の判断に何らかの確証を必要としており、コミュニケーションを苦手とする傾向がうかがえる。

そう考えるとこのような何らかの課題を抱える若者に関して、過度のコミュニケーション能力や対人関係を高めようという環境は彼らにとってストレスを感じさせる可能性がある。

また、効果のある支援体制として医療関係者が特定の施設において相談を受ける形が好まれている一方で、必要性を感じている若者は職業安定所（ハローワーク）が行っている若者を対象とした就職フェアや各種セミナー、模擬面接、心理サポートなどの就職活動支援を利用している。この結果は前出の仕事に関する考え方と一致する。

課題を抱える若者は、仕事や将来にはある程度明確な「答え」を持っているにも関わらず、対人関係において躊躇せざるをえない何らかの理由を抱えており、そのような状況を共感・理解し、肯定しながら必要とする支援を行っていく環境づくりが必要とされている。

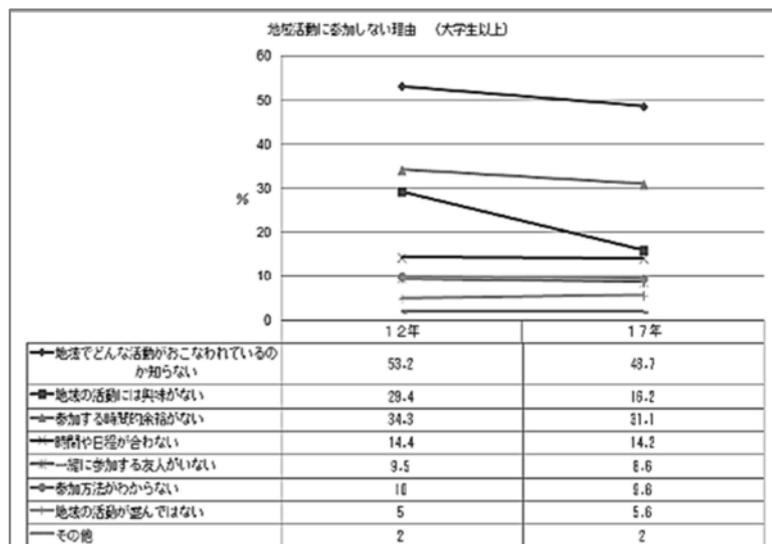
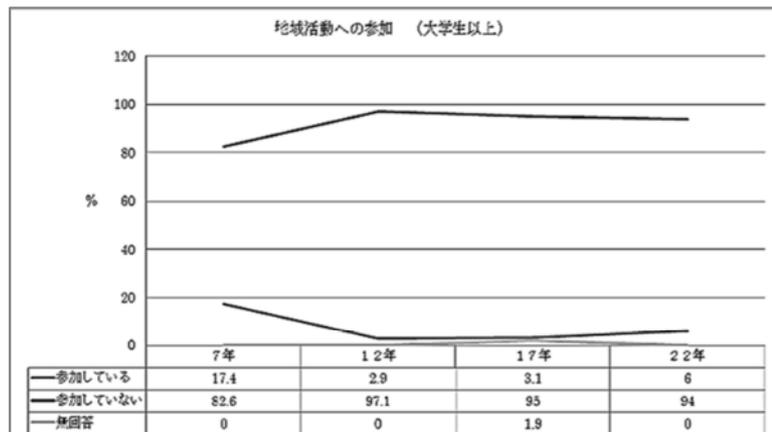
「川崎市青少年意識調査」では、調査対象年齢が13歳～24歳となっているため、市内の若者の意識として考察をおこなう。（資料 38 ページ以降参照）

日常生活の場所・相手・過ごし方は「自宅」で「多数」で「のんびり過ごす」傾向であったものが、近年では「自宅」で

「1人」で「のんびり過ごす」傾向になってきている。また、学校・職場でのグループ・団体活動への参加では、全体的に「参加している」が増加傾向にあるが、社会人でみれば「参加していない」が圧倒的に多い状態であり、やりたいことが見つからず忙しくて時間がとれない状態にあることがうかがえる。

地域活動への参加状況は「参加していない」が約9割を占め、その理由としては、地域でどんな活動がおこなわれているのかわからないという回答が多い。

以上のことから、市内の若者の意識は、個人のゆとりを求める傾向に移行しつつあると考えられる。



## 2. 事例研究報告

川崎市精神保健福祉センター 社会的ひきこもり対策事業  
中原図書館「ボランティアの日」について

「課題を抱える若者」の現状と課題について考えるにあたり、現在、川崎市の社会教育施設が課題に対してどのような取組を行なっているかを調査したが、当事者への取組としては明確に行なわれている事業が殆どみられなかった。しかしその中で、中原図書館、麻生図書館が他の部署と連携して行なっている社会的ひきこもり対策事業の一環として「ボランティアの日」という事業があり、社会教育施設の具体的な当事者への課題取組事例として、ヒアリングを行なうこととなった。

※中原図書館、麻生図書館での「社会的ひきこもり対策事業・ボランティアの日」は、厚生労働省の「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」の、「中間的・過渡的な集団との再会段階」（集団療法、居場所の提供、個人療法、家族支援-集団場面の適応、自信回復、グループワーク、居場所）の意味を持ちながら、ボランティアへの参加を重ねることにより、「社会参加の試行段階」（就労支援、集団療法、居場所の提供、個人療法-就労支援、体験就労、職業訓練、求職活動）に繋げる、過渡的な役割を果たすと考えられる。（川崎市精神保健福祉センター資料による）

2013年9月4日（水）午前10時から中原図書館において、川崎市精神保健福祉センター社会的ひきこもり対策事業「ボランティアの日」による、ひきこもりの本人グループのボランティア作業を視察し、その後担当者にヒアリングを行なった。

### （1）当事者へのヒアリング

ボランティア作業はひきこもりの当事者3名が参加。精神保健福祉センターの担当職員（女性）が1名同行し、図書館職員の説明を受けて作業を行っていた。

作業内容：図書館のバックヤードの作業。内容はシール貼り、訂正作業など。

#### ●参加者のプロフィール

- ・Aさん：男性。40代後半。  
ひきこもりの年数は10年～20年。
- ・Bさん：男性。30代。一昨年から参加。  
ひきこもりの年数は7～8年。
- ・Cさん：男性。20代後半。一昨年から参加。  
ひきこもりの年数は7～8年。

ひきこもり本人グループに参加する人達は、対人面での不安が強く、仕事に一步踏み出すことが困難な人や、新しい場に緊張する人が多い。グループ参加とあわせて、定期的に面接している。

● ボランティア作業の内容（本人たちに取材）

- ・朝、決まった時間に来て決まった時間に終了（午前10時～12時）、月2回。  
その都度作業内容について指示されたものを行う。
- ・ヒアリング当日の作業内容は、本に貼るシールの訂正、貸し出しカードにシールを貼る。  
寄贈本、リユース本の汚れとりやシール張り替え、シールはがしなど。
- ・そのほかリサイクル品を使ってブックスタンドを作る。書棚に掲示する分野や作家ごとの見出しをプラスチックの板で切り出して作る、など力作業もある。時には腱鞘炎になることもある。
- ・心がけていること。一緒にやる人のペースを見ながら作業する。
- ・生活リズムを保つ一助になる。
- ・図書館は新しい本を借りに来ることで時々利用する。

作業をしながら主に40代の方が話をしてくれた。質問されるのは嫌だという反応はなく、自分から進んで話す感じではないが、聞かれれば気兼ねなく答えてくれた。



「リユース資料」などのラベルを裁断し  
貼付する（左上）（上）



紙芯を利用してブックスタンドを作成（左）

## (2) 行政担当者へのヒアリング

見学取材後、精神保健福祉センターひきこもり・思春期相談担当係長から、資料を元にお話を伺った。(資料 41 ページ参照)

### ●現況

- ・社会的ひきこもり対策事業の一環である「ボランティアの日」は2年前から始めた。現在、中原図書館と麻生図書館で毎月2回実施。1回あたりの参加者は3~4名(一度でも参加した人を含めた実人数は各9~10名)。
- ・内閣府の調査などから人口比で推計すると川崎市には7,000人のひきこもりがいると考えられるが、そのうち過去10年で精神保健福祉センターの相談に繋がったのは約1割。

### ●参加者の状況

- ・面接で誘っても参加に至らない人もいる。
- ・仕事を始めたことで参加できなくなる人もいるが、その場合、仕事が軌道に乗るまではできるだけ面談は定期的に継続。
- ・障害者ではないが、一般就労は難しい人が多い。但し、障害者ではないため作業所利用はできず、障害者雇用にも当てはまらない人たちである。
- ・社会不安や対人恐怖で精神科に通院中の人はいらる。中には障害者手帳をとり、障害者の福祉制度に移行する人もいる。

### ●なぜ図書館と連携してこの事業を始めたか

- ・緊張の強い人たちに対して就労支援の前の段階の働きかけが必要。
- ・図書館利用者の中にも、ひきこもりの人がいると思われる。図書館にパンフレットを置いておくとそれを見て、連絡してくる人も過去にはいた。
- ・図書館は人と触れ合わなくてもすむのでひきこもりの人には利用しやすい。
- ・女性だけの日も一度実施したが、女性のひきこもり当事者の割合が男性に比べて少ないこともあり、参加者は1~2名だった。

### ●課題

- ・他の部署との連携が必要。障害者、若者育成、中間就労、生活保護、自立支援室など。
- ・若者サポートステーション、ハローワークと繋がり就労支援をするなど。
- ・傾向として、失敗を恐れる傾向があるので、就労等でも選択肢が少なくなってしまう。あれこれ試しながら考えるのが苦手。向いている仕事が決まってから動くという傾向がある。

### ●これから

- ・図書館は人と触れ合わなくてもすむので利用しやすい。本を媒介にして何かできないか。例えば特設コーナーを作ったり、映画好きな人が多いので映像を利用したり。
- ・初心者グループは2ヶ月に1回開催。その人たちへの働きかけをしたい。

### ●社会教育の分野でできること

- ・図書館ボランティアから就労までの間の支援。コミュニケーションの訓練等。
- ・NPOとの連携等。

### (3) 視察を終えて

ボランティア作業は図書館内の一室で行なわれていたが、図書館と繋がっていることで密室という印象はなかった、作業内容は単純作業だが退屈ではなく、やり方を工夫しながら継続できる内容のようにみえた。

今回は初めてで1回だけの視察の為、ご本人たちにはあまり詳しいお話を伺うことは控えたが、何度か伺えればだんだんといろいろなお話をしてくれそうな印象であった。気楽に話せる相手がいることが大事なこともかもしれない。

作業について「人の役に立つ、いい仕事ですよ」と言ったところ、一瞬表情が和らいだ感じがあり、人から必要とされていると思えることが重要であると考えられる。お会いした印象としては、あえて当事者ですと紹介されなければ、そうとはわからない青年たちだった。

行政担当者の方のお話からは、まだ始めて2年の事業であるが、それなりの効果を感じているようにであった。他の部署との連携や関係NPOとの連携で協力者を増やすことができれば、拡大することができるのではないかと考えられる。またこのボランティア作業から更にバックヤードの仕事に発展していくことができれば、図書館が当事者の一つの働き場所になっていくのではないかと思えた。

人と繋がることに緊張が強い人たちが、それを乗り越えて現代の社会に出るためには、個々人の状態により様々な過程と時間を要するよう思える。また今の社会はそのような人たちを受入れ、雇用継続していける余裕がないことも考えられる。社会の側が変わらないと一旦就労してもまた元の状態に戻ってしまう可能性がある。支援する立場の人間が少ないのであれば、時間をかけて緊張を解く作業を行うよりも、むしろ当事者個々人に合った職場（多少緊張があってもできる仕事）を作り出していくことを考えるのも、一つの方法ではないだろうか。

図書館と精神保健福祉センターの連携により、今回の事業は動いているが、市民館が模索している大学、区役所内の他の部署、NPOとの連携など、他にも繋がれる機関はある。社会教育、社会教育施設としては、今現在課題を抱えている若者たちに対しては、就労を含めた視点での学習機会を設けながら、今回の事例のように、出口（学習の先）を創り出すような他機関との連携を実行することが可能であると考えられる。

### 3. まとめ ー課題を抱える若者と社会教育（施設）のつながりー

#### （1）自己を肯定的に受け止める経験の機会（自尊感情の醸成）

課題を抱える若者は、仕事や将来にはある程度明確な「答え」を持っているにも関わらず、対人関係において躊躇せざるをえない何らかの理由を抱えており、そのような状況を共感・理解し、肯定しながら必要とする支援を行う環境が必要とされる。したがって、ある程度特定の人間で構成される「比較的対人関係の緩やかな」環境や、「他人から必要とされる、あるいは他人から存在を認められる」環境が第一に必要とされてくる。そういった意味では、図書館におけるバックヤードの仕事はこの2点を兼ね備えている。中原図書館の取組みは、図書館という施設が持つ独特の環境が実現可能にさせるものであるため課題を抱える若者へのひとつのアプローチとして捉え、今後の行政間連携の中で課題を抱える若者が、社会復帰に至るまでの通過点としての役割を担うと期待されるものである。

一方市民館について考えてみると、コミュニケーションを苦手とする若者は、既存のサークルや団体にいきなり関わっていくことは難しいと考えられる。その施設の機能・役割からは、市民館においては、課題を抱える若者の受け皿となることまでもを直接的に負うのではなく、主催事業等で課題を抱える若者がコミュニケーション対応を学び、対人関係に慣れる場面を作り出すなどの役割や、課題を抱える若者がこれ以上増えないような取組みが必要であろう。

現在、市民館事業では若者対象の事業が少ないが、これを幼少期から連続性を作り出し、自己肯定感や自己有用感を体験できる環境をつくるためには、それに連動したライフステージごとの学習機会を積み上げていくような施策の構築が必要とされる。

#### （2）広報・情報発信の充実

前出の「川崎市青少年意識調査」から見てとれるように、地域活動への参加状況は「参加していない」が約9割を占め、その理由として地域活動の認知度が低いため地域でどんな活動がおこなわれているのか分からない状態である。また、若者の意識は個人のゆとりを求める傾向に移行しつつある。さらに、情報が溢れている現代においては、インターネット環境の普及などにより自宅にいても多様な情報が入手できるため、個人の判断で自分にとって必要な情報のみ入手するという傾向にあることから、今までの「紙媒体」を中心としたインフォメーションだけでなく、それ以外の方法を組み合わせた取組みが必要とされている。今後の社会教育施設に必要なインフォメーションを考察する。では、どのような方法があるか。

- ① 人伝えの広報
- ② 紙ベースでの広報
- ③ インターネットを利用した広報

この3つを検証してみる。

### ①人伝えの広報

この方法では経験が前提とされ、社会教育施設において自分にとって有益である経験をした後でないとその方法は成立しない。ただし、良く言えば伝達速度が早いのが特徴的であり、現代的な方法に変換するのであれば、有益な経験をした人達によって「twitter」「LINE」等で「参加して良かった」などの社会教育にとって良い情報を拡散させる手段がある。但し、事業内容が経験した人にとって満足できない場合は、悪評も拡散してしまう恐れがあるので注意が必要。

### ②紙ベースでの広報

従来通りと思われるが、その配布場所・チラシの内容によっては大きく異なってくる。現在は市民館をはじめとする特定の目的を持った多数の人が訪れる公共施設において配布している状況だと思われるが、フリーペーパーの様にコンビニエンスストアや不特定多数の人間が行き交う場所での配布という場合はどうであろう。また、内容も文字の羅列が多い内容では第一印象を大事とするチラシの効果は薄く、視覚に飛び込んでくる配置・興味を引くタイトルなど改善の余地があるといえる。さらに、現代社会ではインターネットの普及により広報自体がおこないやすくなっているが、依然として紙媒体を必要とする市民がいることも含め、今後も検討に値する広報である。

### ③インターネットを利用した広報

独自の「face book」・ホームページやブログ・「twitter」・「LINE」など、最も現代的な手段ではあるが発信する際、内容の二重チェックなど、公共施設としての情報モラル等が確立されていることが絶対条件であり、情報発信には細心の注意を必要とする。この情報発信方法は情報収集を個人の判断に頼る部分が多く、安易ながらもその内容の充実が必要とされ、発信内容によっては全く読まれないこともある。

結果的には、ひとつの広報に頼らない状況を作り出すこと、つまりあらゆる広報の発信方法を上手く利用することが大事であり、例えばホームページではなく発信側として情報アップが比較的簡単な「face book」を利用し、「twitter」は最低限の「つぶやき」にとどめ、リツイートやフォロワー（反応）重視にする。また、インターネット利用者の様に情報を主体的にとりに行く市民以外には従来通り、紙ベースの広報を不特定多数が行き交う場所に意図的に配置するなど、ひとつの観点にとらわれないような広報が必要である。

### （3）他分野との連携の必要性

これまで述べたとおり、現在の課題を抱える若者に対して市民館が何かしらのアプローチの可能性を見いだせるかといえば、機能・役割や利用状況を踏まえると「難しい」または「困難」と言わざるを得ない。市民館は課題を抱える若者がこれ以上増えないような取り組みを行っていくことを課題とするべきである。

一方で「中原図書館における精神保健福祉センターとの連携の取組」を見ればわかるように、市民館ではなく別の社会教育施設であれば課題を抱える若者へのアプローチが可能であると

いえる。川崎市内の市立図書館は13館あり、このような施設を利用して他分野との連携をおこなうことは可能である。また、バックヤードのような比較的人との接触が少なく、軽度の作業があるならば青少年科学館や美術館・市民ミュージアムなども選択肢として挙げることができるし、社会教育施設ではないが動物愛護センターなども考えられる。ただし、これらの施設にも限度があるため、あくまでも行政間連携支援の中で課題を抱える若者が、社会復帰に至るまでの通過点としての役割を担うものである。

他分野連携の一翼を社会教育施設が担う形として次の方法を提起する。最初に課題を抱える若者の情報が入りやすい健康福祉局の精神保健福祉センターのような医療・福祉の分野からの要請を受け、図書館のような社会教育施設等が初期の社会復帰への支援をおこなう。さらに、それと並行して経済労働局の若者サポートステーションのような所で就労に向けた相談をおこなっていく。このような社会復帰までの一連の流れが確立できるのであれば、図書館という社会教育施設の特徴を生かした新たな可能性を見いだせる。

課題を抱える若者への支援だけでなく市内にはさまざまな課題が複雑に絡み合い山積している、また区役所移管により市民館の役割は拡大傾向になっていることも含め、行政が市内における諸課題を解決する際にはさまざまな分野と連携する必要性があり、その1つとして社会教育施設が機能することは必要と言える。

#### 【参考資料】

- ・平成24年度「若者の考え方についての調査」（内閣府）  
（ニート、ひきこもり、不登校の子ども・若者への支援等に関する調査）  
[http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h24/pdf\\_index.html](http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h24/pdf_index.html)
- ・子ども・若者育成支援推進点検・評価会議での議論  
平成25年3月15日（金）子ども・若者育成支援推進点検・評価会議第1部会（第8回）  
<http://www8.cao.go.jp/youth/suisin/hyouka/>
- ・「ニートの状態にある若年者の実態及び支援策に関する調査研究」（厚生労働省：2007年）  
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2007/06/h0628-1.html>
- ・ニートに関する実態調査について（文部科学省：2005年）  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo2/002/siryou/06031315/001.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/002/siryou/06031315/001.htm)

## Ⅱ－２ 若者の力をより活かすために

### 1. 若者にとっての地域とは

地域社会において若者が孤立する原因のひとつとして、若者の社会的役割が失われてしまい、帰属意識や自尊感情が得られないことがあると考えられる。現代の若者は高校を卒業した後は、大学、専門学校や職場と自宅の往復を中心とした生活になり、自分たちが生まれ育った地域社会との関係が急速に薄れてしまうばかりか、通学先や通勤先の地域社会と関係を持つことも滅多にない。こうして、いずこの地域社会にも帰属せず、その中で社会的承認を得る機会もない無縁化した若者が生まれることになる。こうした若者は学校や職場以外に頼れる人間関係も作れず、また学校社会や職場社会の中での価値観の中でしか評価されないという脆弱な社会的存在になってしまいかねない状況が危惧されている。そこで、本班では、若者が地域社会における活躍の場を得るためには社会教育には何ができるのかを探る。

本調査では、地域社会の中で活動をしている若者が、何をきっかけに活動を始め、活動にどのような魅力を感じているのかを探ることにより社会的に活躍する場を創出する要因を考えていくことにした。調査対象としては、社会教育施設が関わっていないものの地域に根ざして行われている子ども会の活動と、社会教育施設が直接手掛けている市民館の事例を対照的に調査し研究した。

また川崎市北部には多くの大学があり、大学生が地域社会に対して様々な貢献を行っている。その多くは地元地域外から通っている若者であり、地域社会で生まれ育った若者ではないが、こうした若者が、大学の立地する地域社会に貢献する役割と意義も大きなものがある。本研究ではそうした大学生の地域貢献についても考えていきたい。

### 2. 事例研究報告

#### (1) 子ども会連盟「ジュニアリーダー研修」

##### ①取材の概要

平成25年7月20日(土)10時より川崎市青少年の家において、子ども会連盟による「ジュニアリーダー研修」を取材した。当日は、各地区の青少年育成連盟の役員、シニアリーダー(18歳～25歳 7人)、ジュニアリーダー(中高生、6地区から約30人)が参加していた。

各地区の子ども会が、夏休みに八ヶ岳でリーダー研修会(小学校4～6年生対象)を開催するにあたり、研修会を引率するジュニアリーダー(中高生)に対し、シニアリーダー(大学生～)がジュニアリーダーの心得や役割を教育する、という内容の研修であった。

##### ②ジュニアリーダー研修が始まった経緯

市内には58のこども文化センターがあり、地域の子どもの遊びの拠点となっている。過去には3人の専任の職員がおり、竹馬の作り方を教えたり、鮎を養殖して多摩川に放流したり、遊びやゲーム等の指導をしていた。また、子ども会で毎年行っている八ヶ岳のキャンプには、

各センターの職員が1人ずつ参加し、キャンプファイヤーやスタンプの指導をしていた。しかし、こども文化センターへの市職員の配置がなくなった20年ほど前から、子ども会との関わりも薄れ始め、ゲームや遊びの指導、八ヶ岳のキャンプ等の活動は子ども会の育成者、指導者が行うようになった。

そして、徐々に、ジュニアリーダーを終えた世代からシニアリーダーとして活動への関わりを続ける若者が育ち始め、現在の、シニアリーダーによるジュニアリーダー研修の実施という体制が整ってきたということである。

子ども会連盟としては、子ども達の指導には、子ども達の目線にたてる若い青少年の力が必要であり、中高生のジュニアリーダー、大学生から30歳前後までのシニアリーダーが育ってきていることは、嬉しいことであると考えているとのことである。小学生の子どもリーダーの中から、ジュニアリーダー、シニアリーダーへと進み、子ども会と関わってくれる人材を大切に育てることが望まれており、同時に、こうした若者たちの活動が継続し、魅力ある組織として地域社会と連携を深めていくことが必要である、とのことであった。

### ③研修会の内容

#### 【アイスブレイク】(初対面時などの緊張をほぐす活動)

八ヶ岳へ向かうバスの中や、八ヶ岳での活動中、或いは日常の子ども会活動の中でも活用できるアイスブレイクの紹介と実践を行っていた。

この実践を通してリーダーとしてどのように行動すればよいのか、どう雰囲気を作っていけばよいのかなど、ゲームを通してリーダーとしての動きを教えていた。

また、リーダーとして「常に元気であること」「大きな声で挨拶すること」「大きな声で支持すること」「自らが楽しむこと」などが重要であるという説明もされていた。



ジュニアリーダー研修の様子1

#### 【ジュニアリーダーの役割と心得】

八ヶ岳で活動する時のことをイメージさせて、ジュニアリーダーの仕事や、子ども達との接し方、子ども達の見本となる行動や服装、言葉遣いなどを分かりやすく具体例をあげて説明がされていた。ここでも熱心に話を聞くジュニアリーダーの姿が見られた。

#### 【子ども会の安全】

安全に活動するための注意事項や、応急処置の方法などの説明があった。



ジュニアリーダー研修の様子2

#### ④若者たちの意識

当日参加していたジュニアリーダー、シニアリーダーへの聞き取りアンケート形式による意識調査の結果の主なものは次の通りである（詳細は資料 43 ページ参照）。

質問項目	回答
ジュニアリーダーをやっている良かったこと	<ul style="list-style-type: none"><li>・地域の子ども達と知り合える</li><li>・色々なところに友達ができる</li><li>・人前で話すのが苦手だったが、ジュニアリーダーになって自信が持てるようになった</li></ul>
シニアリーダーになったきっかけ	<ul style="list-style-type: none"><li>・中学生の頃から参加していて、ゲームや講義をしてくれるシニアリーダーに憧れた</li><li>・小学生の時に子ども会の活動に参加している中で、先輩みたいにやってみたいと思った</li></ul>
シニアリーダーをやっている良かったこと	<ul style="list-style-type: none"><li>・継続していることで中高生からの信頼や役員の人との関わりを持ち続けられること</li><li>・子ども達と遊んでいると自分のリフレッシュになり、活動が楽しい</li></ul>
リーダーをやっている苦労していること	<ul style="list-style-type: none"><li>・自分の後を継いでくれるような中高生を育てること</li><li>・シニアリーダーの人数が増えないので人手不足</li></ul>

#### ⑤取材から見えてきたこと

本研修会は、大学生から社会人の年代のシニアリーダーが指導者となり、会の企画、運営を行っていた。シニアリーダーの言動から、研修会が楽しいものであることをジュニアリーダーに味わってもらいたいという思いと、中高生を子ども扱いせず「小学生のお手本になるんだ」という意識を持たせようとしていることが伝わった。

普段は学生、社会人として生活している若者が研修会に集まり、ジュニアリーダーを育てようと真剣に取り組む姿に、シニアリーダーとしての意識の高さと熱い思いを強く感じた。こうした地域の子ども会を中心とした取組が長年に渡って受け継がれていることは大変素晴らしいことであり、リーダーの自信と誇りに満ちた表情がとても印象に残った。

シニアリーダーをやっている良かったこととして「役員の人と関わりを持ち続けられること」という回答があり、地域の大人との人間関係というものが、若者が地域へ関わることの魅力の一つになっている様子が伺え、興味深い。

また、シニアリーダーの中でも、積極的にジュニアリーダーの前で指導する役割の者と、後方支援の部分で重要な役割を担っている者とおおり、そこが居心地の良い居場所になっていて、何となく周囲に受け入れられて、楽しいから来ている、という意識を持たせるだけでもよいのではないだろうかと感じた。

活動に参加している子ども達からは、「人前で話すのが苦手だったが、ジュニアリーダーになって自信が持てるようになった。」などの本人の社会的成長の場となっていることが伺えた。また、ジュニアリーダーからシニアリーダーへ、という流れが、若者達の地域での居場所や役割を創出していること、シニアリーダーがジュニアリーダーたちの手本になり、高校卒業後も地域と係わりを持ち続けていくロールモデルとなっていること、さらに、活動を通して社会的成長が見られる自信が育まれていることが伺われた。

## (2) 宮前市民館「こどもあそびランド」

### ①取材の概要

平成25年8月25日(日)13時より、川崎市宮前市民館において、宮前区地域課題対応事業「夏休みこどもあそびランド」取材した。当日は、ボランティアとして、中学生から25才前後までの若者30人が参加していた。その内訳は、ボランティアとして応募してきた若者25人(男性3人、女性22人)と、市民館事業「文化魂」等のメンバーが7~8人である。



夏休みこどもあそびランドの様子

### ②事業の概要

「夏休みこどもあそびランド」は、宮前市民館において10年以上続いている事業である。市民館の自主事業として始まったものが、市民提案型の協働事業「市民自主企画事業」となり、現在は区役所の地域課題対応事業として実施されている。

市民館全館を使って、舞台での発表や、昔遊び、工作、料理、読み聞かせ、体験教室、ゲームなど子ども向けの様々なイベントを開催している。200人以上のボランティアや、市民館を利用しているサークル団体、地域団体など多くの人の協力を得て、事業が実施されている。

宮前市民館では5年ほど前から中高生を対象としたボランティア講座を開催しているとともに、3年前から中高生の企画運営による文化祭などを実施しており、そうした事業に参加した若者や、新たに「夏休みこどもあそびランド」のボランティアとして応募してきた若者などがこの事業に関わっていた。当日は、ゲームなど子ども向けイベントのブースの運営や、地域の人が運営する各ブースのサポートなどを若者が担っていた。



あそびランドでボランティアとして活動する若者

### ③市民館の意識

各ブースを見て若者の活動を見学した後、市民館長、振興係長、担当職員に取材を行った。まず、各市民館で実施されている社会教育振興事業においては、現在、小中学生や若者を対象とした事業が位置づけられていない中で、宮前市民館に若者が集まっていることについて話を伺ったところ、「市民館利用者世代が二極化して、若い世代が来なくなってしまった。この中間世代を引き入れたくて、若者向けの事業を始めた」との話があった。以下、宮前市民館でそれぞれ取り組まれている事業についての取材結果である。

#### 【市民エンパワーメント研修(7月)】

- ・20年度から中高生を対象にエンパワーメント事業を始め、あそびランド等でのボランティアとして自分たちに何ができるかを考える場とした。

- ・エンパワーメント事業参加者は年度によって4~21人。終了後も3年程度はボランティアやイベント等の案内を送るようにしている。終了後も手伝いに来るリピーターは10~20人に1人。
- ・講座自体は7月中に終わらせて、あそびランドなどの夏休みイベントや秋以降のイベントに繋がるように工夫している。
- ・中高生が参加しやすいように、週1回全5回~10回という従来の市民館の学級スタイルではなく、朝から夕方まで1日の講座を5日間続けてやるなど、コンパクトに凝縮して実施するようにしている。
- ・プログラムに市民救命講習を盛り込んで「資格もとれる」ようなお得感を出したり、市民館の大ホール裏側の見学など、こういう機会でないといけないような場所にも行かれる、というお楽しみを入れて、魅力を出すように工夫している。
- ・募集は学校を通じて中学生全員に配布するようにしている。生活形態や居場所がバラバラになる高校卒業後と違って、中高生は仕組みを作りやすい。
- ・当初は「ヒトに付く」（具体的には担当職員と一緒に仕事をしたいから来る）でもいいが、職員はいずれ異動してしまうので、次第に、ヒトではなくハコや活動そのものに魅力を感じて参加してもらうようになることや、若者同士の関係性の中で、市民館を舞台と一緒に何かやりたい、と思ってもらえるようになることが目標。

#### 【みやまえ文化魂（11月）】

- ・中高生が自主企画する文化祭であり、7月の研修と8月のあそびランドボランティアを経た者が活躍する場となっている。
- ・文化魂の卒業生が関わる方法として、OBが所属するバンドに出演依頼している。これによって、高校卒業後も「市民館に関わっていいんだ」という意識を醸成し、いずれは「市民館に関わるべきなんだ」という意識まで持っていきたい。

#### 【夏休み子どもあそびランド（8月）】

- ・市の広報とホームページでボランティア募集の広報。市外からはホームページで知ることが多いと思われる。そうした外の地域の人たちも歓迎と考えている。
- ・私立中学などでは、夏休みの課題としてボランティア活動を課している学校があるが、社会の側にボランティアの受け入れ先が少ない。その点で、あそびランドのボランティア募集は好都合な機会となっている。最初は課題をこなすために来ても、途中でモチベーションは変化する。共通しているのは、子どもが好きなので来たということ。

#### 【その他】

- ・担当職員本人も、子ども会のジュニアリーダー、シニアリーダー、自然教室の指導補助員、青少年の家でのユースワーカーズクラブ等の活動をやってきた、という経歴がある。

#### ※ユースワーカーズクラブ

川崎市青少年の家において組織されたボランティア組織。青少年の家に職員が配置されていた時代に（現在は指定管理）、施設の主催事業として「青年教室」を実施し、イベントの企画運営を参加者に行わせたのが始まり。その後、事業参加者や施設を利用している団体の若者、施

設でアルバイトをしていた若者等に声をかけ、青少年の家の運営を支援する団体「ユースワーカーズ倶楽部」が設立された。レクリエーションやうどん打ちなどの指導ができる部員もおり、現在でも施設の運営ボランティアとして活動している。

- ・現状では担当職員の個人的力量に頼っている。職員が異動しても続けられるような仕組み作りが必要であると考えている。
- ・宮前区は子育て世代が多いので、その人たちにもっと市民館に関わってほしい。

#### ④若者たちの意識

当日参加していた若者たちへのアンケート形式による意識調査の結果の主なものは次の通りである（詳細は資料 45 ページ参照）

質問項目	回答
本事業に関わるようになったきっかけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・宿題でボランティア活動をしなければいけなかった</li> <li>・ホームページを見て興味を持った</li> </ul>
参加して良かったこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・たくさん子ども達と触れ合うことができて楽しかった</li> <li>・幅広い年代の人と触れ合えた</li> </ul>
地元はどこですか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・宮前区 (58.3%)</li> <li>・宮前区以外 (41.6%)</li> </ul>

#### ⑤取材から見えてきたこと

ボランティアに参加した若者のほとんどの者は学校の課題などを通じての初参加であり、県外、区外からの参加者もあったが、半数以上の者が今後もこうした活動に参加したいという意欲を見せている。若者がボランティア活動に参加している理由として「夏休みの課題としてボランティア活動を課されたので」という声が多かったが、きっかけづくりとして、このような課題をふること自体に意味があるのかもしれない。

また、応募してきた若者、それぞれの持ち味を活かせるような役割分担をさせており、「自分にはこれができる」ということを見つけ出させることが、地域とつながっていける人となるためのエントランスになるのではないかと感じた。

職員側も市民館利用者世代が二極化して、若い世代が来なくなってしまったとの問題意識から出発して、若者の生活形態をよく考えて、7月に集中して講座を開催したり、間をおかずにボランティアの呼びかけ等をしたりと、様々な工夫をしている。複数の事業をうまく組み合わせて、地域社会の中での若者の居場所と自尊心を育てる仕組みができています。現在、一度関わった若者がその後も関わり続けるようにする仕組み作りが模索されているとのことであった。

本研究のテーマは、18歳以上の若者が地域社会と関わりを持つにはどうしたら良いかということであるが、中高生を対象とした本事業は多くの示唆を含むものと思われた。高校を卒業した若者は、生活形態がバラバラで組織しづらい。しかし、組織しやすい中学高校生の間に地域の市民館での活動を経験して、その後に続けようという試みは重要である。

社会から疎外される若者の特徴の一つとして「自己評価が低い」という点が指摘される。思春期の重要な時期に、地域社会の中に社会的評価を得られる場所があることを認識する経験を

積むことは、若者の力を社会に生かすことのみには止まらない重要な意義がある。

一方で、こうした試みが個人の努力、資質に頼っている点は注意を要する。至急、モデルケースとして継続・発展ができるように解析する必要がある。

### (3) 大学生による地域貢献

#### ①日本女子大学の事例

川崎市に居住する若者で、市外で学びあるいは働く者もいるし、一方、川崎市外に居住する若者で川崎市内で学びあるいは働く者もいる。市内居住の若者と市外居住の若者の両面において川崎という地域、社会教育とのつながりを見ていくのがよいだろう。

日本女子大学西生田キャンパスには、附属中学、高校、大学、大学院、生涯学習センターなどがあり、川崎市居住の生徒、学生、院生もいるし、市外居住者でも通算で14、5年、生徒・学生・院生として在学、在学し、川崎市で学ぶ者もいる。これらの若者の中には川崎市という地域に愛着をもち、つながり、就職する者も決して少なくない。

日本女子大学生涯学習センターは、いわゆる生涯学習講座のほかに、子育て支援の事業や心理相談の事業を併設している。また、学内での講座や事業にとどまらず、多摩市民館で出前講座を行ったり、多摩区3大学連携事業（専修大学、明治大学）で区内の社会教育施設などで活動を行ってきている。これらの事業、活動を展開する中で、学生たちが地域とつながり、地域に愛着をもち、活動を続けている。

最寄りの駅・小田急線読売ランド前駅は、普通電車停車駅で、沿線ではかなり地域色が残されているローカルな地域であり、駅前には茅葺の家（白井家）の建物も残されている（白井家は地元の大地主でランド駅の敷地2000坪の寄贈者）。駅前や周辺に大規模店舗は小田急OXを除けば、皆無で、商店が健在で、商盛会という商店街組織は区内でも1、2を争う組織であるといわれている。

地域住民は、昔からの住民といわゆる新住民が共住し、住民の中には、「(読売)ランド前駅」という商業的な駅名をむしろ「日本女子大学前駅」という名称に変更して欲しいという者もあり、日本女子大学生涯学習センターと地域住民、商店街、地域自治会・町内会が協同して、川崎市の町づくり課の支援を受けながら「読売ランド駅前プロジェクト」という町づくりの組織を作り、活動を始めた。

最初は、若者（女子学生）に興味があるお菓子づくりから始め、地元のお菓子屋さん、ケーキ屋さん、パン屋さんとコラボをして、オリジナル商品を企画、学園祭のときに駅前やキャンパス内で販売し、その中のひとつであるお菓子は川崎市の「名産品」（商品名ミス・チェリー）に指定された。



商店街と女子大学生のコラボ企画による焼き菓子(ミスチェリー)



女子大学生のデザイン  
によるエコバック

その後、今度は、若者（女子学生）のグラフィックな興味、才能を活かし、商店街と川崎市の支援を得て、エコバッグをデザインし、その内の数点は実際に商品化され、流通することになった。続いて、商店街よりTシャツのデザインの作成を依頼され、これも製品化されを得た。

また若者（女子学生）たちは駅前にゴミが落ちているのが我慢ならないらしく、「町をきれいに」「駅前をきれいに」ということで「必殺！掃除人」という活動を地域住民、商店街と連携して駅前のクリーン活動を行った。

このような活動と実績が評価され、商店街より、駅近くで閉鎖されている商店の建物の提供を受けることになり、「SAKURABO」（女子大のシンボル・桜の咲くサテライトラボの略）という小さな社会活動施設がオープンし、地域交流、社会活動、学習活動がさらに展開されることになった。

最近の活動としては、「大学は美味しい！フェア」に参加し、東京・新宿高島屋でおにぎりや米粉のスイーツを出品し、また「宙と緑の科学館」のリニューアル記念に米粉のスイーツを披露している。活動は地域とのつながりを深め広めつつ、区内、市内、市外へと発展している。

## ②和光大学の事例

和光大学は東京都町田市に本部を置いている大学であるが、その敷地は町田市と川崎市にまたがっており、敷地の54%は川崎市麻生区岡上である。学生の多くは神奈川県、東京都等から通学する者からなる。開かれた大学という方針を持ち、生涯学習サービス「オープンカレッジばいであ」を運営する他に、体育館やグラウンドの地域開放、図書館一般開放をしているとともに川崎市立図書館との相互貸借協定を結んでいるが、学生の自主性を重んじる学風のため学生たちが主体的に独自の地域貢献をしている。

麻生区岡上地域は川崎市の飛び地であり、大部分が市街化調整区域であるため多くの農地と緑地を擁し、史跡や行事など伝統的農村文化も色濃く残しており、特別緑地保全地区や市条例指定「緑の保全地域」が散在し、和光大学の

川崎市側の敷地内にも「岡上和光山緑の保全地域」がある。こうして残された岡上の緑地や水辺の管理をする団体のひとつとして和光大学の学生グループ「和光大学・かわ道楽」

（以下、かわ道楽）がある。かわ道楽は30人ほどの学生サークルであるが、40以上の団体からなる鶴見川流域ネットワークに所属して、多くの市民団体や行政と連携して鶴見川流域の緑地と水辺の保全活動を行っているが、その重点は岡上にある。



学生グループによる鶴見川での夏休み親子教室

活動では雑木林保全として大学内外の3カ所の雑木林で、選択的下草刈り、常緑樹間伐などの整備作業や植生調査などを定期的に行っている。これにより希少植物を含む貴重な生態系が維持管理されている。また小川等の水辺の管理を行い、ホトケドジョウ（環境省レッドデータブック絶滅危惧IB類）など、かつて川崎市北部の谷戸に見られた水生生物の保護、繁殖を行っている。岡上北部を流れる鶴見川本川では、年に2回の河川清掃の他に生物調査を行い、アユやナマズを含めた多くの生物の生息を確認して地域の話題となった。

こうした保全された自然環境を地元地域の市民と共有するために、かわ道楽の学生は毎年2回、地元の子ども向けの自然観察会を10年以上続けて、身近な自然の楽しさを伝えている。また今年は麻生区文化協会夏休み親子教室として鶴見川に入り川魚を捕る体験教室も担当している。このイベントを指導する学生は指導者資格を持ち、子どもたちに川に入るにあたっての安全対策を十分にとって地元地域の川の楽しさを伝え、地域の山河への愛着を育てている。同様の行事は毎年、町田市と相模原市の子どもを対象としても行っている。他にも地元岡上小学校4年生の川の学習や小学校裏山雑木林の整備の支援、地元保育園児の川遊び体験指導、どんぐり教室指導などの支援をしており、身近な自然の重要性を子どもたちに伝える活動を行っている。



地域住民と大学生が協力する「どんど焼き」

かわ道楽の活動は自然環境のみを対象としておらず、地元の伝統行事である「どんど焼き」においても地権者や岡上西町会と連携して準備段階から参加している。「どんど焼き」当日は汁粉やトックの炊き出しを行い、祭礼参加者にふるまっている。また岡上西町会主催の夏の納涼祭では他の学生と連携して盆踊りの櫓の組み立て、夜店の準備などに参加して、地元町会と交流を深めている。

こうした学生の活躍は和光大学の教育システムにも組み込まれているが、あくまで学生が主体となって続けられている。他にも大道芸や遊戯支援など、岡上地域のお祭りやこども文化センターで活躍する多様なジャンルの学生団体が地域場で活躍している。

かわ道楽の学生たちは、鶴見川流域ネットワークの市民やNPO法人などや地元町内会の住民と交流し、その活動を評価される機会に恵まれる。また小学校の発表会や保育園の卒園式に招待されることもある。こうした交流と地域社会からの評価を受けて、学生たちは地域の中に自分の役割を見だし、社会的承認を得ていると感じていると思われる。こうした体験から地元地域が好きになり、卒業後、岡上に住む者もいる。

### ③大学生の事例を振り返って

以上、市内の大学の事例2件を振り返ってみると、商店街、自然環境とそれぞれ地域貢献のポイントが異なるものの、地元の地域社会の中での居場所が確立しているという点が顕著であ

る。日本女子大学生の例はお菓子作り、意匠デザイン、美化など、女子大学生ならではの感性や能力を生かして、自分たちも自ら楽しめる事業を行うことによって商店街の評価を得ている。和光大学の例は山林や河川の生きもの採集・観察や地域の子どもたちとの交流などを通して、自ら楽しみその結果が地域から貢献として評価されるというしくみになっている。こうした自分の好きな活動を通じて、地域社会に貢献し、地域社会の評価を得るという機会に恵まれた若者は、自尊感情を持ちやすく、また社会の中に自分が孤立しているという感覚になりづらい。どこかで、社会が自分にほほえんでくれているという原信頼のようなものを得た若者は、他の地域においても地域社会との繋がりを作ることでできる感性を得るのではないだろうか。

こうした若者は大学生という、地元地域にとってはいわば「よそ者」である。上記の2例を見た限りでは、そうした「よそ者」に地域の重要な役割を任せる、あるいは施設や山林のような地域資源の管理・運営を任せることができる力量が地域社会にあることもうかがわれる。どちらの事例でもいわゆる新住民と旧住民が共に学生を信頼していることも示唆的であると思われる。大学生というよそ者の若者に活躍の場を与えるには、大学側の働きかけも重要であろうが、若者を信頼して重要な役割を任せる地域の度量も重要であるのかもしれない。

### 3. まとめ

以上、ジュニアリーダー研修（事例1）、宮前市民館の事例（事例2）、大学生の事例（事例3）を振り返ってみたい。事例1と事例2は、どちらも主として地元地域で育った若者の活躍の事例であり、前者は行政の施策から自立した例、後者は市民館が中心となっている例である。しかしどちらも中学生の時期から地域と繋げる試みより始まっており、それが高校卒業以後の若者の地域での立ち位置の確立に繋がっているという点は共通している。高校生の時期まで地域と繋がった経験がない若者が、大学生、社会人になっていきなり地元地域とつながることはハードルが高いと考えられる。もっと前の段階から、若者が地域に参加するための土台をつくることが大事であり、中学生や高校生の時からジュニアリーダーやあそびランドのボランティアをやっていることで、自分にできることを見つけ出させることが、地域とつながっていける人となるための入口になっている。

一方で事例3は、これらとは異なる地域との繋がりの方である。ここで紹介した学生たちは、彼らの居住地の地域社会の中に役割を持つというよりも、むしろ大学生になってから初めて大学の地元地域の中に自分の社会的居場所を見つけ出している場合がほとんどであろう。たとえ彼らが大学の中で孤立したり、学業や友人間で評価を得られないことに悩むことがあったとしても、大学周辺の地域社会との交流はそうした大学生活とは全く異なる価値観の中で自分を試し、社会的認知を得る機会に恵まれることになる。このことは卒業後の彼等の社会性にも大きな力となることであろう。こうした経験が大学周辺の地元地域に居住したり就職したりして、地域社会を支える若者を育てることに繋がることも示唆される。

若者が成長するにつれて、生まれ育った地域社会から外の世界に目を向けていくことは、ある意味では必然的なことであり、必ずしも否定されるべきことでもない。むしろ、その生活の中心となる大学や職場の地元地域の中に彼らを包摂し、その人格を承認する社会があることが

望ましいのではないだろうか。地元社会から巣立った者が、別の地域社会の中で居場所を見つけ活躍するしくみがあることも重要なのではないだろうか。川崎で育った若者の力が他地域の社会で活かされ、他地域で育った若者が川崎の地域と繋がることでも、地域社会と若者の新しい関係が形成されることになるだろう。

このように活動を任される場所があることを認識する経験を積むことは、若者の力を社会に生かすことのみには止まらない重要な意義があり、社会教育がそのしくみをつくる必要がある。

### (1) 若者を地域社会とつなげるための工夫

それではどのようにすれば、若者に地域社会で活躍する場を提供することができるのであろうか。上記の例はいずれも、子どもたち、若者たちをまとめて地域社会と繋げる組織があることが示唆される。事例1では子ども会組織によって地域社会の一員となっている子どもたちが引き続き地域社会の中に留まりシニアリーダーとして自分たちの後輩を育てることに役割を見だしている。事例2ではボランティアやエンパワーメント研修への参加を、中学高校を通じて募っており、事例3でも大学組織や学生組織が学生を地域と繋げている。これらのことから、子ども会や学校のように子どもや若者が組織されている団体を通じて働きかけることから始めることが有効であることがうかがわれる。

### (2) 若者の活動を継続させるための魅力

こうした地域の活動に若者が参加するきっかけ作りだけでなく、彼らの間で定着させることが重要であることは言うまでもない。実際にシニアリーダーでもあそびランドボランティアにしても実際に続けていく若者は多くはなく、後継者を育てるために現場が努力している姿がうかがわれる。

一方で大学生などのボランティアは、成長と共に地域社会を離れる若者の「補充」のような役割を果たしていると考えられることもできるかもしれない。しかし大学の事例でも大学生の間だけの活動になるために、同じ人間が長期的に地域と信頼関係を保ちながら続けることが少なく、活動が新しい学生に引き継がれていかないと途絶えてしまいかねないリスクをはらんでいる。

いずれの場合も、もともと彼らが好きで、やりがいを感じていることであり、地域社会からの評価を得られることでもあるから、続ける意欲は十分に持っていると思われる。しかし就職などの生活リズムが変わっても続けていけるかどうか大きな問題と考えられる。こうした生活スタイルの変化時に関係を続ける工夫と、生活スタイルが変わっても続けられるような無理のない活動スタイルを工夫することが必要と考えられる。

### (3) 社会教育が果たす役割

こうした事例を振り返って、社会教育に何ができるかを考えて見たい。「ジュニアリーダー研修」の例では直接の社会教育の関与はないものの、八ヶ岳の施設を利用する前段階の研修であることは示唆的である。こうした若者が子どもに、あるいは子どもが子どもに指導伝受する場を伴うような子どもの行事があることが前提となっているからである。宮前区の事例でもるように、現在の社会教育施設では子ども向けのプログラムは多く開催されている。こうした

プログラムの中に年長の子どもが年下の子どもに伝えるような学び合いの場を増やすことによって、その年長の子どもを指導する若者を育てる場が増えてくるのではないだろうか。こうした活動の中核となる中高生はこうした学び合いの場から育っていると共に、中高や大学を通じて参加を呼びかけて新たな参加を得ることも有効であろう。

子どもたちを指導する、あるいは補助する中高生がそのまま地域社会に止まる工夫としては宮前区の事例が参考になろう。文化魂の音楽バンドの出演者としてOBを呼び、彼らに市民館について「自分たちがいても良い場所」という認識をもたらし、さらに「自分たちの居場所」と感じさせるようにしようと試みている。やりたいことを見出した若者に、自分のやりたいことが地域の中で活かせる場を見出すようなイベントを組むことが、若者が地域を「自分たちの居場所」として捉え直す重要な契機となろう。

こうした若者の居場所として地域を捉え直す上では、地域の大学も重要である。彼らは卒業すると地域から出て行ってしまいう者が多いが、彼らが社会教育施設を含めた地域住民と接する場に出入りすることで、社会教育施設に子どもと高齢者以外の姿がいつも見られる風景が現出すれば、地域内外の若者が「自分たちの居場所」として感じるようになるであろう。こうした大学生と地元の若者が交流することによって新たな関係も生まれてくることも期待される。こうした大学生の地域参加を促す点では、様々な催し物を自由に企画できる社会教育施設は非常に有効な組織である。大学に呼びかけ、サークルなどで自分たちのやりたいことを見出した若者を、子ども向け教室や地域行事などで講師や企画者として積極的に取り入れることで、大学生が地元社会と接点を持つことへの意欲を刺激することができるのではないだろうか。そうして社会教育施設を通じて、地元の若者と交流し、地域社会の中に居場所を見つけた大学生は地域に居住、就職を希望し、川崎市の地域社会を支える意欲も湧いて来るであろう。

## Ⅱ－3 若者の生きる力を育み、若者が生きやすい社会にするために

### 1. 今日の若者の育ちと地域（社会）教育活動

#### 働くことと若者

今日、ある若者は大学に進学し、ある若者は高校を卒業して労働現場や何らかの学習の機会を持つ。大学に進んだ者は、卒業後に労働の生活に入っていくことになる。若者にとって 18 歳から 20 歳代前半は「仕事に就く」（労働者としてのスタートを切る）時期であるが、今日の若者の課題の一つが、この「労働」の問題と絡んでいる。

この 10 年、「若者問題」が「フリーター・ニート」問題として浮上している。さらに「ワーキングプア」問題とも関連している。若者の労働そのものとの向き合い方や、若者が働く意思を持ち行動を起こしているものの、生活を成り立たせるほどの収入が得られないという実情が今の日本に現実としてあるということ。若者の過半数が非正規労働におかれていること、などが関連しあっている。これらのことよって、若者の多くは経済的自立や結婚の見通しが立たない状況にある。このことが問題として取り上げられるようになった。

#### 若者が抱く存在感

若者の多くは「自分がこの社会に必要とされるのか否か」という不安を抱え込んでいる、という心理面における課題を抱えている。若者が社会に対して後ろ向き・否定的なイメージを持っていることが NPO 法人「自殺対策支援センターライフリンクの調査結果からもうかがえる。

「不合格通知がきたときに人間否定されているように感じた」り、就活中に本気で死にたいと思っている学生が 10.0%、以前に自殺を考えたことがある学生が 27.3%にのぼった。

日本社会はいざという時に「援助してくれる」と思っている若者は 35.0%だったのに対して、「何もしてくれない」は 65.0%であった、若者と社会との関係は信頼や親密度に乏しい。また、正直者が「報われる社会だ」と考えている者は 31.1%に対して、「バカを見る社会だ」と考える者は 68.9%というように、社会を批判的に見ている。こうした社会観は、最近の 5 年間で「就職失敗」を理由にした自殺が 2.5 倍に急増していることに結び付いていないだろうか。

#### 若者の自殺

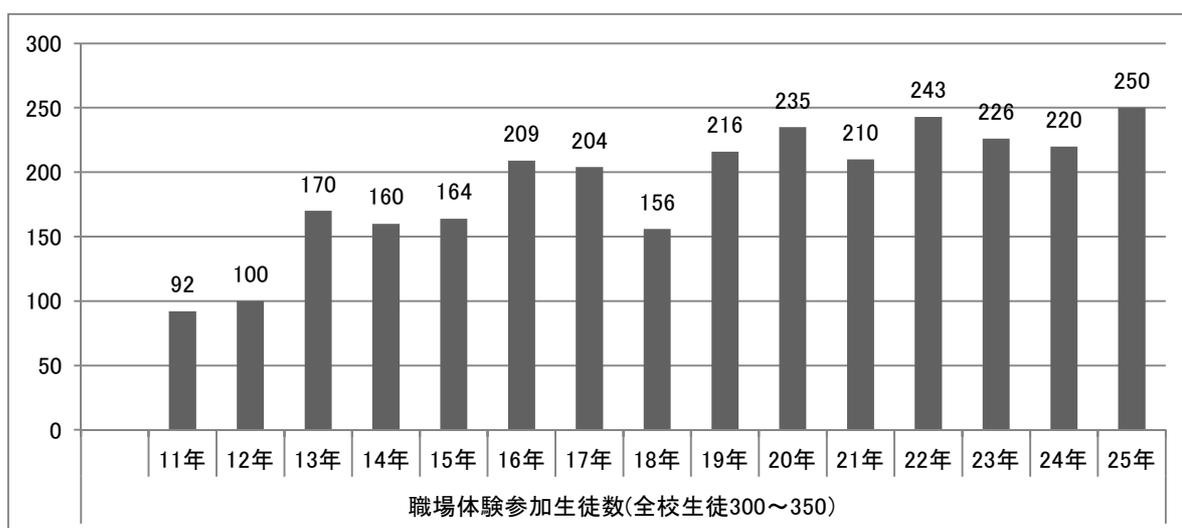
2013 年 6 月 21 日の東京新聞に、「川崎市内 20 代の自殺者、昨年の 2 倍」と報じられ驚くべき事態となっていることが明らかにされた。全国平均 10.8%なのだが、川崎市の場合は 20%と、川崎市に居住する 20 代の若者が全国平均の 2 倍も「生きることをやめた」事実は重い。それは現実の社会や自分を取り巻く環境に「生きる価値」を見出せなかったことを意味する。この現象は、「自尊心がない」「自信がもてない」小学生たちが増えていることと合致する。青年期に簡単に自殺を考えてしまう要因の一つでもあるといわれる。

こうした若者の課題に応える社会教育をどのように創造していけばよいかを探っていくために、次のような実践に注目したいと考えた。

## 2. 事例研究報告

### (1) 臨港中学校区地域教育会議「職業体験」受け入れ事業所

臨港中学校区地域教育会議では、15年前から中学生の希望参加で地域内外での職場体験、夏祭りでのみこし担ぎや、盆踊り会場でのソーラン節演技を続けてきている。かつて、荒れる学校で有名だった中学校が、今や地域から期待のまなざしで見守られている。生徒は「地域は私たちにとって一つの大きな家です」と言い、「地域で生きる！」とアンケートに書く。そして今、昨年末に続きこの夏2回目の東北被災地への中学生のボランティア活動も実現した。中学生だからこそできる人とのつながりの素晴らしさがあった。



一連の活動は、取り締まりやバッシングではなく地域と中学生のよい出会い、良いつながりを作ろうと言う意思から始まったものだ。地域が、彼らを優しさで受け止め、彼らを必要とする舞台をつくり自己肯定感を育ててきた。この夏、私たちはあらためてこの地域を調査した。この時、体験学習を受け入れてきた方からこんな声を聞いた。



「6年以上お付き合いしている生徒さんが先日言っていました。この“夢クラブ”(職場体験先の一つ)と縁がなかったら自分はどうなっていたか分からなかった。本当によかったと思っています・・・と言われました。心に悩みを抱えているこの年頃の方たちの相談相手もさせてもらっていますが、“ああこの子はここまで成長し、自分を磨いているんだなあ”と思いはんとうに嬉しかったです。」

“夢クラブ”に応募した子たち  
楽器の練習をしてデイサービスで演奏

## (2) 若者の心に届く腹話術の実践

腹話術に取り組んでいる城谷社会教育委員は、日吉中学の授業の一環である「進路教室」において、腹話術による講演「私の未来を描くのは私だから」という演目で講演した際に、中学生の生き生きとした姿を読み取っている。城谷は、やる前には「今どきの中学生が果たして聴いてくれるかな」と不安も抱いたが、1時間20分の長時間にも拘わらず、体育館を出て行く者も騒ぐ者も眠る者もなく真剣に聴いてくれた。寄せられた感想では、「自分の将来について考えるきっかけができた」ということだった。そういうことを考える機会が日常の中でないことが浮き彫りになった。

また、城谷は大学においても興味深い実践を展開している。

和光大学授業「人生と仕事」は、堂前社会教育委員の紹介で、腹話術による1時間の授業を実施した。学生たちの感想で一番多かったのは「0か100かではなく、10でも20でもいいから始めよう」ということと、「夢を持ち続けようよ」という呼びかけに対する反応だった。感想文を読んで、多くの学生が、コツコツ努力を続けることよりも一か八かという刹那的な思考で、あきらめるときは簡単にあきらめてしまう傾向にあるのではないかという不安を感じた。同時に、若者に対して頑張るきっかけをつくってあげればもっと頑張れるんだということも感じた。この生徒たちが被災地ボランティアをやれば、自分もどれだけ役に立つ人間かが実感してもらえらると思う。

## (3) 菅生こども文化センター「わんぱく生活学校」

「菅生こども文化センター」(以下菅生こ文)“わんぱく生活学校”の取組から検証してみる。出発は1977年。途中諸事情による休活を経て37回の継続となる。

なぜ、37回も一つの事業が続いたのか。その理由は次の4点に凝縮される。

- ① 継続する力があった。子どもに寄り添う熱い想いの大人(職員)の存在があったこと。
- ② 地域に「菅生こ文」という、サンダルでふらっと行ける「場所」があったこと。
- ③ 地域住民の支持と支援。地域の全世代の参加のつながりが見えること。
- ④ 「ONEぱーく」という中学生等が中心になって運営されていること。

「ONEぱーく」とは、“わんぱく生活学校”のリーダーたち(中学生・高校生・大学生・社会人)を中心に運営されている月1回開催の年間を通じた仲間づくり活動である。半期ごとに野外活動を主にした企画を公表する。活動は夏の「キャンプ」に焦点をあて、ご飯の炊き方・カレー作り・仲間作り・ひとりで寝る体験等、子どもたち(小学生)が参加できる体験準備をする。



←みかん狩り



→棒巻きパン作り

毎年、夏のキャンプ(2泊3日)から帰還すると、「子どもが自信をつけた」「お兄ちゃんらしくなった」等々、保護者から感想が寄せられる。菅生こ文(指定管理者)の針山館長は、「わんぱく生活学校」とは、子どもが『生きる力をつけていく』場と断言する。

『生きる力をつける』活動は、社会教育の原点である。リーダーとして活躍する兄弟をみて弟妹が参加してくる。今では、リーダーの子どもたちが参加している。孫の世代も参加するし、地域につながりの輪が作られている。「ONEぱーく」のリーダーたちが社会人となり負担が大きくなれば、職員が事務局的な存在となり、負担を軽減するようにして継続されてきた。

(職員の異動がない)指定管理者だから継続できたこともある。市行政の約3年のサイクルで職員が異動する現状は、事業を継続する場合に不利である。

### 【「わんぱく生活学校」のプログラム】

#### 平成18年(2006) 後期(11期)

月日	内 容	費 用	持 ち 物
10月28日	午前：芋ほり、きのこごはんづくり 午後：スイートポテト作り	200円	軍手、お米1合、お皿、おわん、おはし、タオル、水筒、
11月25日	一日：みかん狩りにいこう!! 午前9時集合。午後4時解散になります。	1320円	弁当・水筒、敷物、雨具、
12月23日	午前：もちつき大会 午後：クリスマスケーキづくり	300円	軍手、皿、はし、タオル、水筒、
1月27日	午前：節分太巻きづくり 午後：まめまきとゲーム大会	200円	軍手、お米1合、皿、タオル、水筒
2月24日	午前：ポイントラリー・プラネタリウム見学 午後：駄菓子屋さん	200円	お弁当、水筒、
3月24日	午前：焼肉パーティー、燻製作り 午後：ペットボトルロケットづくり	300円	軍手、お米1合、皿、おわん、はし、水筒、

#### 平成19年(2007) 前期(12期)

月日	内 容	費 用	持 ち 物
4月28日	午前：韓国・朝鮮料理 チヂム・クッパ作り 午後：草団子作り、仲間作り遊び	300円	軍手、お米1合、お皿、おわん、おはし、タオル、水筒、
5月19日	一日：しながわ水族館へ行こう!! 午前8時30分集合。午後4時解散になります。	1220円	弁当・水筒、敷物、雨具、
6月23日	午前：棒焼きパン&ソーセージ 午後：キャンプゲーム	200円	軍手、皿、はし、タオル、水筒、
7月28日	午前：流しそうめん 午後：水遊び	200円	軍手、おわん、はし、タオル、水筒 水着、バスタオル
8月10日～ 12日	丹波山村(奥多摩) 木下ファミリーキャンプ場	予定 12000円	場所は決まりましたが、詳細は現在計画中です。 詳しくは6月23日以降お知らせします。
9月22日	午後：3時～ミニ縁日・カレー作り 夜間：キャンプファイヤー～8時まで	300円	軍手、お米1合、皿、おわん、はし、水筒、

「わんぱく生活学校」は、菅生という地域限定と指摘されるが、むしろそれが重要なのだ。こうした取組はつながりという点で、地域で「若者が生きやすく」するための布石といえる。市内の社会教育機関には、「若者とつながり」を保つために似た布石を模索する取組は増えているが、「人との交わり」を拒絶している若者の本音を把握できているのだろうか。呼びかけても訪問しても、本人に会えないままである。そこが弱点ではないか。地域が広いことや参加してくれないことを、理由にはいけない。社会教育に携わる側から「ひきこもりがなぜ問題」なのか、多くの人々が共感できる確かなメッセージを発信できていない。早急に取り組む必要がある。

### 3. まとめ—「あなたが必要」という、確かなメッセージを

事例として取り上げた取組みは、若者に焦点をあてた取組みであるが、その課題を深くとらえてみると、まさに“生きる力”の原点が問われているといえる。その根底にあるのは、まず自分を尊ぶ気持ちではなからうか。そこから自信も生まれる。自分自身が自分を大切にしないわけではない。その当然のことが揺らいでいる時代にいるとなれば、相当大きな課題を私たちは突き付けられているということを実感しないわけにはいかない。

昔の人は「十人十色」と言って、人は一人ひとり違っていいと教えた。自分と他者との違いは個性であり、それを特段こだわることなくおだやかな眼差しを向けていたと思われる。今や、学校でも地域でも家庭でさえ、個性が大切にされているはずが、みんなと同じでなければ生きづらい、そういう時代の風を受けているのではなからうか。学校は「個性を生かす教育」を掲げるが、現実には個性を生かせる状況ではない。

中学2年生頃まではふざけていても、その後は受験・就活に“リクルート化”を装って生きる。背景に、競争社会・格差社会の現実があり「若者が生きにくい社会」となっている。学校教育もその中に組み込まれているから「なぜ個性を生かすことが難しいか」を論じることはしない。

こうした体験を通じて感じることは、次のようなことである。

- ・若者の多くは、自分の将来に期待を持ってないでいる。
- ・若者の多くは、努力する目標を見いだせないでいる。
- ・若者の多くは、助けてほしいのに「助けて」と言えないでいる。

そして、

- ・彼らは、手を差し伸べれば握り返す力を持っている。
- ・彼らは、自分が必要とされる社会を欲している。

と考えることができる。それに応える環境や仕組みが必要なのではないか、そこに社会教育の出番がある。

若者を中心にした災害救援ボランティアの充実ぶりやフットワークの良さを見れば、「若者」は決していつも不活発で目立たない位置にいるわけではない。むしろ災害時においては率先してボランティアに参加し、被災者の大きな心の支えとなっている。こうした若者のエネルギーな活動は新しい「つながり社会」を誕生させる可能性を感じさせる。

菅生こども文化センターの例にもあるように、人が成長していく過程で、様々な人との良い出会いと活動が人への信頼感情や社会的力を育む。それが、やがて子どもたちが社会に出た時生きる上での大きな支えになっていくのではないか。私たちはこうした行為を「孤立」、「無縁」という言葉の対照として「つながり社会」という言葉で描こうとしている。社会教育的実践の効果的な展開によって、若者に生きがいを感じることができる社会をしっかりと展望したい。

先日、NHKの『クローズアップ現代』で紹介された事例に、一つのヒントがある。『秋田県藤里町は、“ひきこもりを地域の力に”を合言葉に、全戸訪問調査を行った』。調査は3年かかり、社会福祉協議会・自治会町会・PTAのネットワークで何回も訪問して調査。その結果、人口3800人のうち113人(18歳から54歳、若者は町外へ)のひきこもりの存在が判明。何度も訪問してその理由が「働きたいが職がない」ことが分かった。

- ・そこで、資格をとれる講座を開くと、多くのひきこもり者が参加した。
- ・次に、就労支援施設を公的に作った。
- ・さらに、まちづくりの一環として、働く場を作った。

そして、ひきこもりの人たちが家から出て働き、人とのつながりを持つようになった。

教育を終えた後の労働生活をめぐる葛藤が多く、若者に広がっている。労働への参加はそれ自体が社会への参加を意味し、そこでの問題は、若者の社会参加をめぐる問題であり、すなわち、ひきこもり等として顕在化し広がっている。

社会教育はこのような若者の状況に対して何ができるかという問いを持つ時、若者の社会参加を促す活動がどのような状況にあるか、またそこから、若者支援のあり方を構想することができるかを考えなくてはならない。方法論の一つに、商店会などからんだ地域の祭りなどへの参加にヒントがあると考えている。そこでは、「仲間と同じ目標を持って、やりとげる」機会が持てることによって、楽しさを感じ、また、地域の人々に温かく迎え入れられる体験が実感として受け止められるところに意義がある。こうした取組みは、本来、地域社会が持っていたはずの機能でもある。

そこで、そういう地域活動の促進に対して、社会教育の果たしている役割について注目していく必要がある。今、社会教育に携わる者は、来てくれない相手を待つだけでなく積極的に打って出ることが必要だ。秋田の例では、地域総出で課題解決に動いている。地域の大人のヤル気をひき出せたからではないか。本来の社会教育の理念から言えば、地域の大人を教育することも大切な仕事であったはずである。

「若者が生きやすい社会」にするためには、社会教育の理念に則った地域人の力が必要である。事例として取り上げた臨港中学校区の取組や秋田の取組、菅生こ文の実践から、一定のヒントがひき出せる。川崎市について考えると次の3点を提案をしたい。

- ①地域に根差した大人の実践し持続する力が大事であるので、社会教育の原点に立ち返り、地域活動を持続できる 大人を育てることが急務。
- ②各種団体や地域住民との連携が不可欠。もはや社会教育だけでは対処できないことから、地域住民がその人生経験を生かして、小中高校・大学の場にゲスト・スピーカーとして参加できる機会を増やす。
- ③青少年育成のいくつもある団体がバラバラで活動するのではなく、まとまって活動できるよう、「連絡協議会(仮称)」など社会全体で取り組めるようにする。

社会教育の現場に、地域の大人の潜在的力を引き出し実践につなげていく力が必要だ。そのためにも若者の支援という教育・福祉的課題に取り組む専門的な知識や技術をもった職員の配置が求められるところである。

### Ⅲ 全体のまとめと提言

今期の川崎市社会教育委員会議は、「若者」と「つながり」をキーワードに、社会教育もしくは社会教育施設はどのように機能しているのか、何ができるか、について検討した。

第1グループは、地域とつながれない若者に焦点をあて、地域や社会そのものとかかわりが希薄な若者に対して、社会教育施設がいかに手をさしのべ、かかわりを作っているかについて検討した。

図書館のボランティア事業等を通してみえたのは、対人関係に躊躇をしている、自分に自信が持てない若者が大勢存在していることだった。若者は、社会や地域とかかわりを持たないのではなく、持てないことで悩んでいるのである。

第2グループは、若者の力を地域によりいかすために、現在すでに活動している若者がどのようなきっかけで活動をはじめたのかといった、若者が社会的に活躍する場を創出する要因について検討した。

子ども会連盟のジュニアリーダー研修、宮前市民館事業、地元の大学生による地域貢献の事例を通じて得たのは、若者が地域とつながるためには、中学生や高校生の時からの土台作りが大事であり、地域に自分の出来ることがあると気づいた時、若者はその情熱を発揮するのである。

第3グループは、ややともすれば社会とのつながりが希薄になりがちな若者に対して、大人や地域社会はどのような力を発揮して、若者の生きる力をはぐくみ、支えているのかについて検討した。

中学校区地域教育会議による中学生職場体験受け入れ事業及び震災ボランティア活動、「進路教室」や大学の授業に腹話術を導入し、若者に自分の将来を考えさせる試み、菅生こども文化センターにおける「わんぱく生活学校」等の事例を通して、社会や大人は若者に対し「あなたが必要」という確実なメッセージを積極的に出し続けることが大切であり、また若者同士つながりを作るべく、自分から手を差し出すことができる大人の育成も社会教育の使命である。

各グループの検討をもとに、今期の川崎市社会教育委員会議は以下のことを提言したい

- ① 若者の自尊感情や自己肯定感を高める機能を持った社会施設環境の充実
- ② 社会教育・医療・福祉等の多元的な社会資源が分野を超えての事業連携
- ③ 若者の参加意欲と居心地感を意識した市民館講座の充実
- ④ 若者同士が教え合えるシステムの確保もしくは場の提供
- ⑤ 若者の情報収集手段に沿った情報の提供及び参加の呼びかけ
- ⑥ 若者を支える地域コーディネーター、親である市民を支える連絡協議会の存在
- ⑦ 若者の地域活動を持続的支えられる「度量のある」地域と市民の育成

#### ①若者の自尊感情や自己肯定感を高める機能を持った社会施設環境の充実

「誰かの役に立っている」感覚を持ちやすい、図書館のボランティアのような事業はまだ少ない。今後は中身を充実にして、展開していただきたい。しかし、心身のエネルギーが低く、時には病院に通っている若者も参加されるので、社会とつながれない若者が社会とつながるためには安心感や安全感を含めた様々な準備が必要。合わせて、若者が参加しやすい環境づくりや工夫を考える社会教育の専門家等の配置も今以上に必要になる。

#### ②社会教育・医療・福祉等の多元的な社会資源が分野を超えての事業連携

川崎市の場合、市民館を中心に、様々な自主団体が多くの講座を開設し、市民同士の交流を深めているが、大勢の人と関わるのが苦手な若者はすぐに環境に適応することは難しいかも知れない。しかし、そのような若者でも、ハローワークが主催する講座には興味関心を抱く可能性もある。今後は例えば、市民館企画ハローワーク主催の事業等の連携を視野にいれ、できるだけ幅広く多くの若者のニーズに合わせた事業の展開が必要であろう。

#### ③若者の参加意欲と居心地感を意識した市民館講座の充実

市民館には多くの講座があるが、年齢の低い子どもやその保護者が多く利用することから、若者が興味関心を抱く内容のものは少ない。若者と地域のつながりを考えた場合、若者の参加意欲を高める企画をさらに意識する必要がある。また、市民館のイベントに若者が参加した時、参加したメンバーが「参加してよかった」という満足感とその場に「自分がいても良いのだ」という居心地感が大切である。市民館は地元の人が行く場所だけでなく、その地域で生活しているすべての人にとっての、社会とつながる拠点となることが、若者を地域につなげることができる。

#### ④若者同士が教え合えるシステムの確保もしくは場の提供

若者は自分の主体性を大切に考える。また、学び合う喜びがわかる存在でもある。ジュニアリーダー養成研修のような行事を通して、若者同士が出会い、さらに、シニアリーダーがジュニアリーダーに様々なノウハウを伝承することによって、地域文化や伝統のつながりが生まれる。若者の主体性を大切にすることによって、より生き生きとした地域が生まれ、同時に若者が活躍する場も創出されるのである。

#### ⑤若者の情報収集手段に沿った情報の提供及び参加の呼びかけ

現在、若者の殆どは地域の社会活動に参加していない。その理由の一つは、広報の問題にある。今の若者は「集団」よりも「個人」に重点を置き、様々な情報を「紙ベース」ではなく「インターネット」から収集するのが殆ど。大量な情報が氾濫している中、若者の目にとまる、分かりやすい情報提供の仕方及び参加の呼びかけ方についてさらに工夫する必要がある。

#### ⑥若者を支える地域コーディネーター、親である市民を支える連絡協議会の存在

若者が地域とつながるためには工夫が必要だが、そのため、きちんとした組織が存在していることが大切である。また、現在、川崎市の青少年育成にはいくつもの団体が活動しているが、団体ごとの活動であるため、活動の全容が把握されにくいことから考えても、恒久的な組織とコーディネーターの存在が必要。コーディネーターが組織の中核にいて、様々な事業を若者に伝え、つなげることで、若者は地域と継続したかかわりができるのである。そのため、地域コーディネーターの存在は大きく、社会教育主事のような専門家は大切である。

同じく、若者やその親である大人をエンパワーメントするものとして、「連絡協議会」のような、社会全体で取り組める組織も必要である。

#### ⑦若者の地域活動を持続的に支えられる「度量のある」地域と市民の育成

生まれ育った地域から出で立ち、よその地域で生活し、社会とつながるのも若者の特徴である。このように、若者と地域社会とのつながりを考える時、「若者」は地元の若者でも、「よそから」の若者でもあり得る。川崎の若者がよその地域に行き、川崎の文化を伝えるのと同じく、よその若者は彼の地の文化や伝承を川崎に持ってくる。ここにおいて、さらに広い意味での文化の創造が生まれる。若者と地域とのつながりを考える時、大人は「地元」や「よそ」の考えを飛び越え、すべての若者を応援する広い度量を持つことが大切である。このような度量のある市民を育てることも社会教育の役割であると考えられる。

若者を支え、温かい声援を送りたい大人は大勢いる。社会とのつながりが希薄になりつつある現在こそ、継続的に若者にその存在意義のメッセージを届ける必要がある。社会教育委員会議はこれからも若者と若者を持続的に支えられる力のある市民の育成を大切な役割の一つとして考え、行動したい。

## 資料

### Ⅱ－１ 関係資料

内閣府「若者の考え方についての調査 報告書（ニート、ひきこもり、不登校の子ども・若者の支援等に関する調査）」（H25.3）より

調査方法 クローズド型インターネット調査

調査対象者 A：15～29歳で、①ニート、②ひきこもり、③不登校、④高校中退のいずれか又は複数の経験のある若者（現在、その状態にある場合も含む）

B：15～29歳の上記に該当しない若者

有効回答数 3219 サンプル

調査対象 Aの①から④各類型の定義

#### ①ニート

学校(高等学校、大学、専門学校のほか、予備校等も含まれる。)に通っておらず、独身であり、仕事を探しておらず、普段収入になる仕事をしていない状態が1週間以上あること。

#### ②ひきこもり

普段ほとんど外出をしない(自室からほとんど出ない、自室からは出るが家から出ない、近所のコンビニなどには出かける、趣味の用事のときだけ外出する)状態が6か月以上であること。ただし、病気、妊娠、出産・育児、自宅で仕事・家事をしているため外出しない場合を除く。

#### ③不登校

小学校、中学校、高等学校又はそれに相当する学校において、年度間に連続又は断続して30日以上欠席した児童生徒のうち、何らかの心理的、情緒的、身体的、又は社会的要因・背景により、児童生徒が登校しない又はしたくともできない状況にあること。ただし、病気や経済的理由によるものを除く。

#### ④高校中退

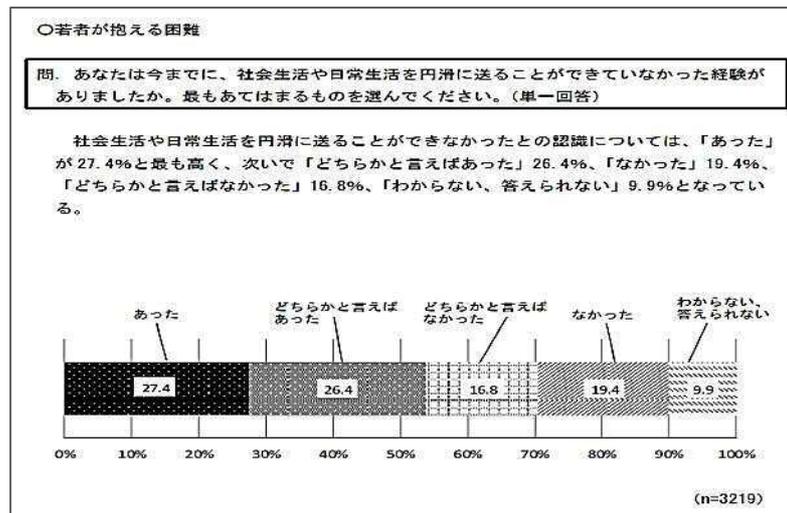
高校を中途退学した者。引っ越しや親の転勤に伴わない転学をした者も含む。ただし、経済的な理由、病気による中途退学や転学を除く。

抽出方法 インターネット調査会社の登録のリサーチモニター

## 傾向

### 【若者が抱える困難】

- 今までに日常を円滑に送ることができていなかった経験がある若者は(単一回答)「あった 27.4%」、「どちらかといえばあった 26.4%」の回答合計が 53.8%



- 社会生活や日常生活を円滑に送ることができていなかった経験があると認識している場合、一番大きな原因(単一回答)として、「ニート」が 12.2%と最も高いが、「わからない」の回答が 43.1%と上回っている。
- 社会生活や日常生活を円滑に送ることができていなかったと思う自分自身についての主な理由では(複数回答)、「人づきあいが苦手だから」が 52.6%、「何事も否定的に考えてしまったから」43.3%、「悩みなどを相談できなかったから」34.7%となっている。
- 社会生活や日常生活を円滑に送ることができていなかったと思う家族・家庭についての主な理由(複数回答)では、「家族内の不和や離別があったから」が 19.2%と最も高く、「親への反発があったから」14.7%、「親からの自分への過度な期待があったから」14.2%となっているが、「その他 24%」や「特になし 29.7%」の回答が上回っている。
- 社会生活や日常生活を円滑に送ることができていなかったと思う仕事についての主な理由(複数回答)は、「本当に自分のやりたい仕事ではなかったから」が 20.1%と最も高く、「上司や同僚との関係が悪かったから」18.8%、「職場になじめなかったから」16.5%となっているが、「特になし 24.5%」の回答が上回っている。

### 【相談対応や支援を行う機関・団体、支援の在り方】

- 社会生活や日常生活を円滑に送ることができていなかった経験がある場合で、支援を受けた中で最も効果のあったと感じる人は(複数回答)、「医師や保健師などの医療関係者」が 24.0%と最も高く、次いで、「スクールカウンセラー」10.7%、「臨床心理士などの各種カウンセラー」10.0%となっているが、「効果があったものはない」が 45.7%を占めている。
- 支援を受けた中で最も効果のあったと感じる方法は(複数回答)、「施設に通って相談する」が 25.3%と最も高く、次いで、「電話で相談する」12.6%、「メールで相談する」7.1%となっているが、「効果があったものはない」が 38.9%を占めている。
- 困難を有する子ども・若者を支援する機関・団体を利用しようと思ったきっかけは(複数回答)、「自分で活動性を感じて」の場合、「職業安定所(ハローワーク)が行っている、若者を対象とした就職フェアや各種セミナー、模擬面接、心理サポートなどの就職活動支援」64.6%、「ジョブカフェ」53.3%、「地域若者サポートステーション(サポステ)」53.1%と高くなっている。

また、「親に勧められて」の場合、「教育支援センター（適応指導教室）」41.7%、「病院・診療所が行っている、不登校やひきこもりとなっている人に対する支援活動」41.2%と高くなっている。

- 困難を有する子ども・若者を支援する機関・団体で利用したことで問題の改善に効果があった場合に最も効果のあった支援機関・団体は（単一回答）、「職業安定所（ハローワーク）が行っている、若者を対象とした就職フェアや各種セミナー、模擬面接、心理サポートなどの就職活動支援」が30.7%と最も高く、次いで、「ジョブカフェ」13.4%、「教育相談所・相談室」10.4%、「教育支援センター（適応指導教室）」6.5%となっている。
- あなたが、社会生活や日常生活を円滑に送ることができないようなときに、相談・支援を受けたい人について（複数回答）、「親身に話を聞いてくれる人」が33.2%と最も高く、「同じ悩みや経験を持っている人」30.9%、「年上だが年齢は自分とあまり離れていない人」26.1%となっている。

#### 【その他】

- 次にあげたことがどのぐらい（自分に）当てはまりますか。（単一回答）という設問について

※ はい（計）（「はい」＋「どちらかと言えばはい」。以下同じ。）

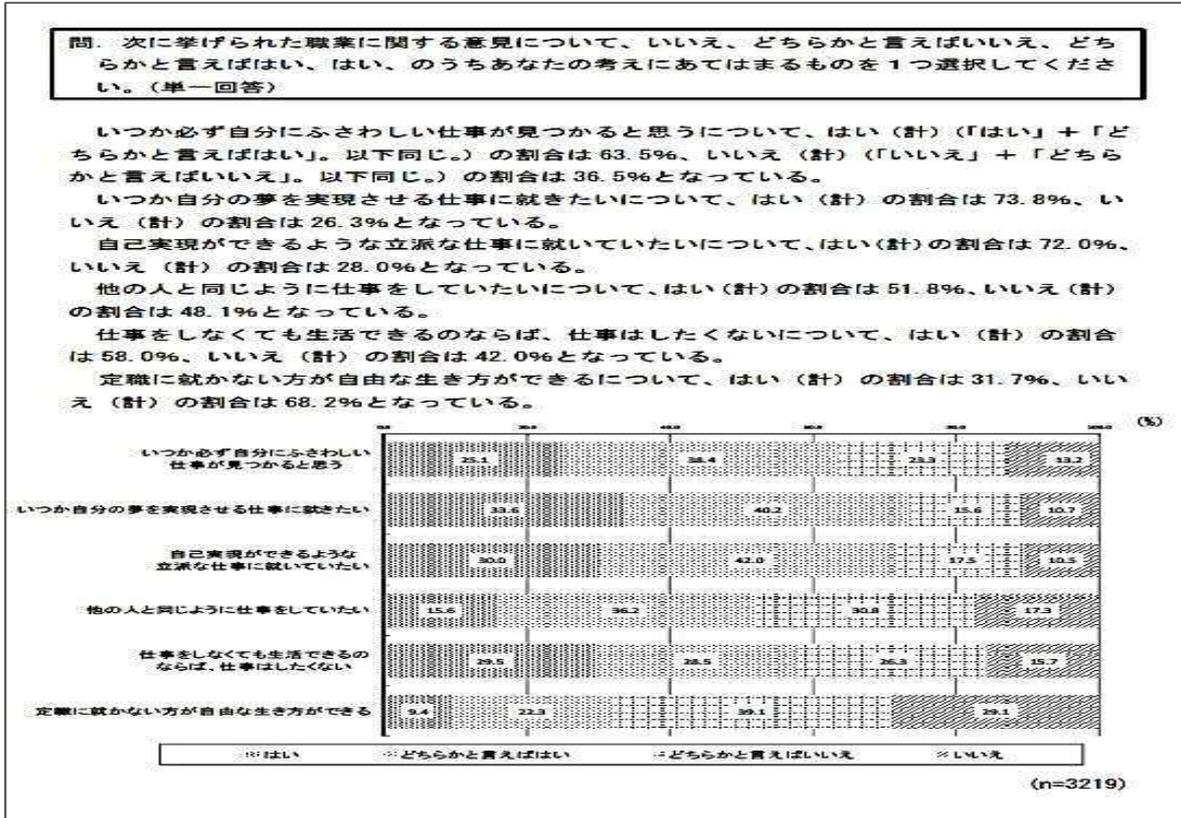
※ いいえ（計）（「いいえ」＋「どちらかと言えばいいえ」。以下同じ。）

- (1) 友だちから悩みを打ち明けられることが多いについて  
はい（計）の割合は45.8%、の割合は54.2%となっている。
- (2) 嫌いな人・苦手な人とも、うまくつきあえるについて、  
はい（計）の割合は42.3%、いいえ（計）の割合は57.8%となっている。
- (3) 自分の考えをはっきり相手に伝えることができるについて、  
はい（計）の割合は44.9%、いいえ（計）の割合は55.1%となっている。
- (4) 私は、自分自身に満足しているについて、  
はい（計）の割合は35.2%、いいえ（計）の割合は64.9%となっている
- (5) 自分には長所があると感じているについて、  
はい（計）の割合は57.8%、いいえ（計）の割合は42.2%となっている。
- (6) うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組むについて、  
はい（計）の割合は51.0%、いいえ（計）の割合は49.0%となっている。

- 次に挙げられた職業に関する意見について（単一回答）

- (1) いつか必ず自分にふさわしい仕事が見つかると思うについて、  
はい（計）の割合は63.5%、いいえ（計）の割合は36.5%となっている。
- (2) いつか自分の夢を実現させる仕事に就きたいについて、  
はい（計）の割合は73.8%、いいえ（計）の割合は26.3%となっている。
- (3) 自己実現ができるような立派な仕事に就いていたいについて、  
はい（計）の割合は72.0%、いいえ（計）の割合は28.0%となっている。

- (4) 他の人と同じように仕事をしたいについて、  
はい（計）の割合は 51.8%、いいえ（計）の割合は 48.1%となっている。
- (5) 仕事をしなくても生活できるのならば、仕事はしたくないについて、  
はい（計）の割合は 58.0%、いいえ（計）の割合は 42.0%となっている。
- (6) 定職に就かない方が自由な生き方ができるについて、  
はい（計）の割合は 31.7%、いいえ（計）の割合は 68.2%となっている。



●自分が 40 歳くらいになったときどのようになっていると思いますか。（単一回答）という設問について

- (1) 「結婚している」は、  
そう思う（計）の割合は 62.0%、そう思わない（計）の割合は 38.0%となっている。
- (2) 「子どもを育てている」は、  
そう思う（計）の割合は 58.1%、そう思わない（計）の割合は 41.9%となっている。
- (3) 「幸せになっている」は、  
そう思う（計）の割合は 65.8%、そう思わない（計）の割合は 34.2%となっている。

(2) 川崎市「川崎市青少年意識調査」(H2～H22) より

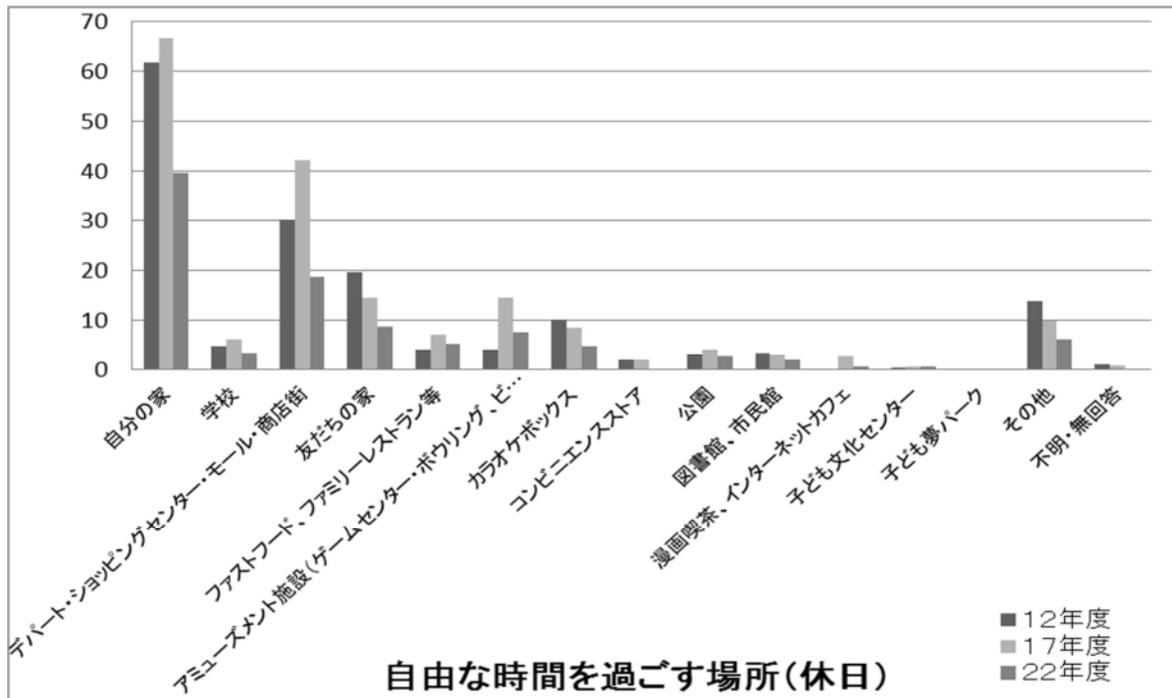
調査方法 郵送配布・郵送回収法 (H12：訪問回収)  
 調査対象者 市内在住の満 13 歳以上 24 歳までの男女  
 H7：2,000 H12：1,500 H17：4,000 H22：3,000  
 回収状況 H7：935 H12：791 H17：1,313 H22：1,094  
 抽出方法 H7：住民基本台帳に基づく無作為抽出  
 H12～22：住民登録及び外国人登録のある者から無作為に抽出

傾 向

【日常生活】

自由な時間を過ごす場所

過去 10 年間に 3 回の調査 (12・17・22 年度) をおこなっているが、平日においてはどの年度も「自分の家」が最も多く、次いで「学校」、「デパート・ショッピングセンター等」となっている。但し、「自分の家」は経年で減少の傾向がうかがえる。

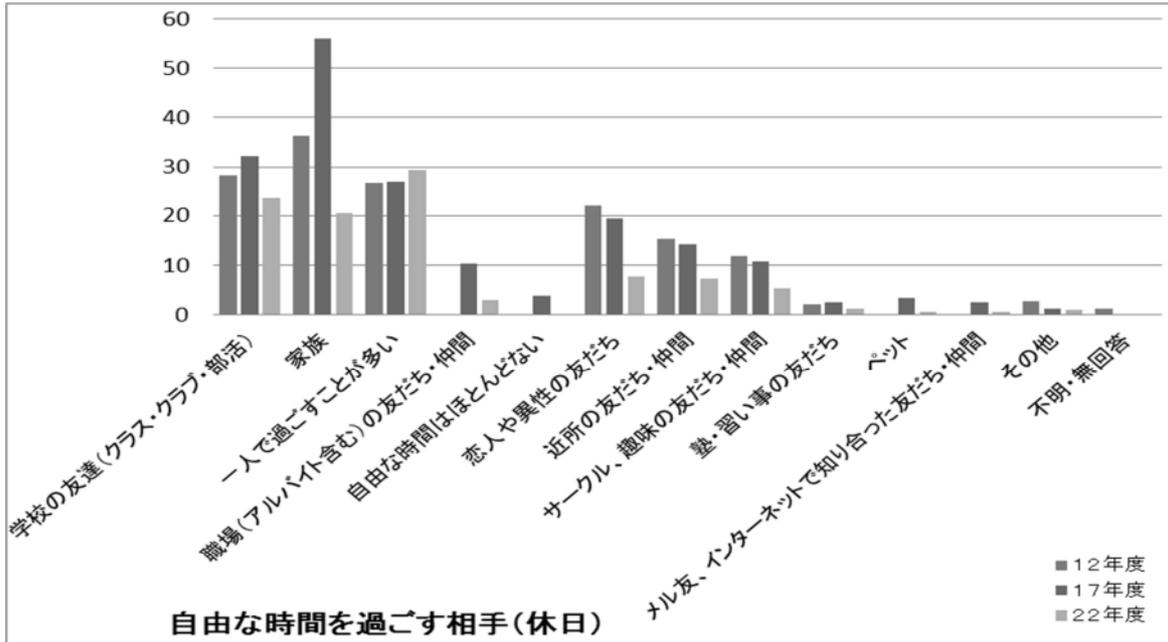


休日においても「自分の家」が最も多いがその割合はさらに下がり、次いで「デパート・ショッピングセンター等」、「友だちの家」が増加して続く傾向となっており、休日の外出傾向がうかがえる。

自由な時間を過ごす相手

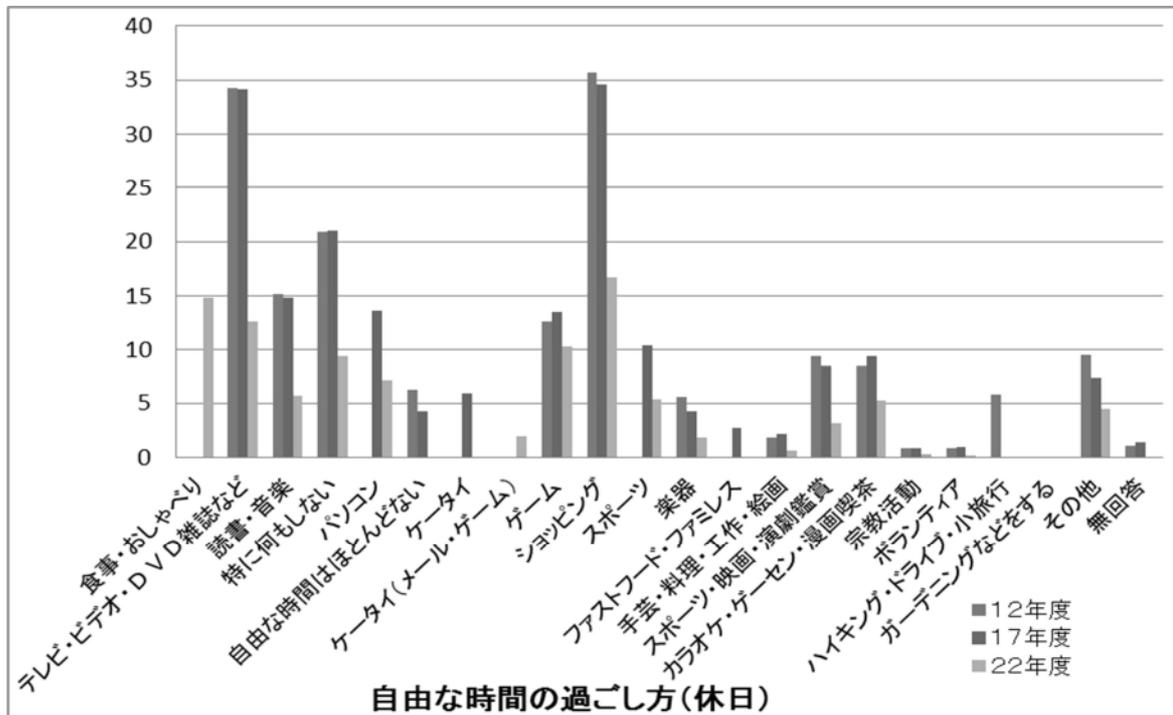
過去 10 年間に 3 回の調査 (12・17・22 年度) をおこなっているが、平日において 12・17 年度は「学校の友人・部活の友だち」が最も多かったが、22 年度は「1人で過ごす」に変化している。

また、休日においても12・17年度は「家族」が最も多かったが、22年度は「1人で過ごす」に変化しており、日常生活で「1人で過ごす」傾向が強くなっている。



### 自由な時間の過ごし方

過去10年間に3回の調査(12・17・22年度)をおこなっているが、平日においては場所として「自分の家」が多い傾向を受け、「テレビ・ビデオ・雑誌などを見てのんびり過ごす」などの自宅でくつろぐ傾向が多く見られる。



また、休日でも場所の影響を受けて自宅でくつろぐ傾向は多いものの、「ショッピングに出かける」も多くの回答がある傾向にある。

## 【学校・職場でのグループ・団体活動への参加】

### 部活動・団体活動への参加

統計全体では「参加している」が増加傾向にあるが、大学生以上が増加傾向にあるだけで、社会人は横ばいかつ「参加していない」が70～80%の状態にある。

### 学校・職場でのグループ・団体活動への参加しない理由

統計全体では経年比較で「やりたいと思うグループ・団体活動がない」と「忙しくて時間がとれない」に合計で約50%集中しており、次いで「参加してまでやりたいことがない」や「その他」回答となっている。

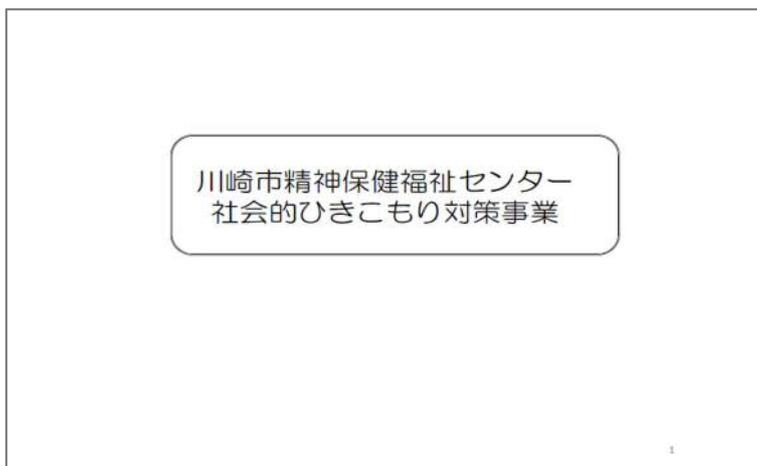
大学生以上と社会人では「忙しくて時間がとれない」が経年増加傾向で、「やりたいと思うグループ・団体活動がない」と「参加してまでやりたいことがない」は横ばい傾向。

### 地域活動への参加

全体・大学生以上・社会人すべて同じ傾向で「参加していない」傾向が約90%ある。

### 地域活動へ参加しない理由

22年度が単一回答のため経年比較できないが、「地域でどんな活動がおこなわれているのか知らない」が全体・大学生以上・社会人すべてで1番多く、次いで「参加する時間的余裕がない」や「地域の活動には興味がない」となっている。



**ひきこもりとは**

厚生労働省  
「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」

様々な要因の結果として社会的参加（義務教育を含む就学、非常勤職を含む就労、家庭外での交遊など）を回避し、原則的には6ヶ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態（他者と交わらない形での外出をしてもよい）を指す現象概念である。

なお、ひきこもりは原則として統合失調症の陽性あるいは陰性症状に基づくひきこもり状態とは一線を画した非精神病性の現象とするが、実際には確定診断がなされる前の統合失調症が含まれている可能性は低いことに留意すべきである。

↓

知的障害や発達障害の場合もある

ひきこもりは「病名」ではなく「状態」  
ひきこもりの背景は様々  
ひきこもりの背景に統合失調症がある場合も少なくない

統合失調症やうつ病でひきこもっている場合は治療が必要  
知的障害や発達障害の場合は福祉制度利用も検討

**ひきこもり**  
例えばどんな状態かというと…

基本的に精神症状ではないという前提

- 家族との交流がなく、自室からほとんど出ない
- 家族との交流はあるが、家からほとんど出ない
- 買い物などの外出はするが、家族以外の人との交流がほとんどない
- 外出や友人・知人等との交流はあるが、通学・仕事などの社会参加の場がほとんどない

※ 内閣府や川崎市の調査では、ひきこもり者の約9割は外出可能であるが、その多くは相談には繋がっていないのが実態。

≪ 川崎市のひきこもり者数 ≫

〔内閣府 H22年7月 ひきこもり実態調査〕 ひきこもり者 全国約70万人  
〔川崎市人口 (H25年8月現在)〕 1,446,579人 (世帯数 677,805世帯)



推計 7,000人 (内閣府の調査をもとに、川崎市の人口比から推計)

≪ 川崎市のひきこもり相談の開設から現在まで ≫

- ・ 2000年 「新潟少女監禁事件」「佐賀バスジャック事件」
- ・ 2001年 厚生労働省より「ひきこもりガイドライン暫定版」が発表  
市議会で「ひきこもり」「虐待」が話題となる  
⇒ 同年10月、川崎市社会的ひきこもり緊急対策設置。相談開始。
- ・ 2011年 ひきこもり地域支援センターに位置づけ

4

事業としてなにをしているか

面接相談  
家庭訪問  
(本人・家族)

家族会  
(学習会・懇談会)

本人グループ

普及啓発  
(講演会・パンフレット作成)

職員体制 (2013年度)

- ・ 常勤2名 (社会福祉職・心理職)
- ・ 非常勤嘱託員4名 (社会福祉士・精神保健福祉士等)

5

精神保健福祉センター ひきこもり相談

※ 数値は平成24年度

〔個別相談〕

新規：48件  
継続：116件  
面接相談延数：683件  
家庭訪問延数：125件

家族からの相談が77%(初回)  
男性 67%  
平均年齢 30.6歳

〔本人グループ〕

実施回数：103回  
延参加人数：542名

(料理)(ゲーム)(話し合い)  
(麻雀)(スポーツ)  
(女性の日)(初心者グループ)  
(ボランティアの日)

〔家族会〕

実施回数：6回  
延参加人数：121名

〔講演会〕

実施回数：1回  
参加者：49名

6

## ボランティアの日

### 経緯

社会福祉法人川崎聖風福祉会川崎市社会復帰訓練所（あやめ作業所）が図書館に場面提供をしていただき、「就労前実習」という形で行っていたが、業務見直しに伴い、図書館実習を終了することになった。ただ、あやめ作業所としては、実習場面の少ない時期から、ご理解をいただいた実習先なので、実習場面を消失させてしまうのは本意ではなく、責任をもって引き継いでくれる機関を模索。様々な社会参加場面を求めていた社会的ひきこもり本人グループの意向と合致し、各図書館の了解も得られたため、「ボランティアの日」として実施することとなった。

ひきこもり対象者にとって、「職業訓練」という言葉には敷居の高さを感じる方もおり、また「仕事はまだ無理だけどボランティアはやってみたい」という声もあったため、図書館側の了解を得て、ひきこもり対象者には「ボランティアの日」としてご案内している。

7

## ボランティアの日

### 〔特徴〕

- ・ 黙々と単純作業をするため、グループ初心者も入りやすい
- ・ 決められた作業を行い、就労に向けたステップアップ
- ・ 40代のひきこもり者の居場所
- ・ 参加者によって利用目的は様々

### ～H24年度 実施状況～

#### 麻生図書館（月2回）

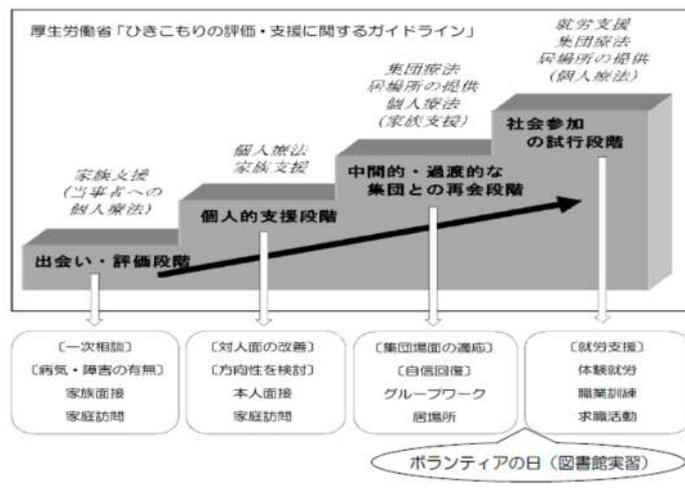
回数：19回  
 参加実人数：9名（8名・1名）  
 参加延人数：78名（71名・7名）  
 平均参加人数：4.1名  
 平均年齢：31.4歳（22～44歳）

#### 中原図書館（月2回）

回数：16回  
 参加実人数：10名（9名・1名）  
 参加延人数：58名（57名・1名）  
 平均参加人数：3.6名  
 平均年齢：平均30.7歳（25～38歳）

8

## 《ひきこもり支援の諸段階》



## Ⅱ－２ 関係資料

### ①こども会連盟「ジュリアーリーダー研修」に参加していた若者へのアンケート結果 (ジュニアリーダーの若者たち)

ジュニアリーダー研修会への参加のきっかけ
<ul style="list-style-type: none"><li>・同じジュニアリーダーをやっているいとこのすすめで</li><li>・ジュニアリーダーをやっていたら、地区の役員さんに声をかけられた</li><li>・活動が楽しいので。</li></ul>
リーダーをやっていて良かったこと
<ul style="list-style-type: none"><li>・地域の子ども達と知り合える</li><li>・自分のスキルがあがる</li><li>・色々なところに友達ができる</li><li>・他の区や県のジュニアリーダーと友達になれた</li><li>・普段できないようなことがたくさんできる（レクなど）</li><li>・人前で話すのが苦手だったが、ジュニアリーダーになって自信が持てるようになった。</li></ul>
どんなリーダーになりたいか
<ul style="list-style-type: none"><li>・子ども達から好かれるリーダーになりたい</li></ul>
研修内容で印象に残ったこと
<ul style="list-style-type: none"><li>・ケガなどの対処の方法をすることができた</li></ul>

### (シニアリーダーの若者たち)

シニアリーダーになったきっかけ
<ul style="list-style-type: none"><li>・小学5年生の頃に、市内全区で行っている八ヶ岳でのリーダー研修会に参加したいと思い、区内で行われている子どもリーダー研修会に参加し、ジュニアリーダーの姿に憧れて入会した。その後、ジュニアリーダーとしてもっと成長したいと思い、市内の研修に参加するようになった。</li><li>・中学生の頃から参加していて、ゲームや講義をしてくれるシニアリーダーに憧れた。</li><li>・小学生の時に子ども会の活動に参加している中で、先輩みたいにやってみたいと思った。</li><li>・小学生の時から子どもリーダー、ジュニアリーダーと活動を続けてきて、高校を卒業し、今後の子ども会活動をどう続けていくか考えた時に、シニアリーダーズクラブに入って小学生や中高生との関わりを続けたいと思った。</li><li>・小学生でリーダー研修会に参加し、リーダー活動を中学1年生から始めた。その中で、ゲームのレポートリーを増やしたいと思い、ジュニアリーダー研修会に参加し、今に続いている。</li></ul>
リーダーをやっていて良かったこと
<ul style="list-style-type: none"><li>・人前で話すことに慣れた</li><li>・将来、教師になりたいと思っているので、すごく自分の力になっていると思う。</li><li>・レベルの高い仲間と共に切磋琢磨しながら成長できる。</li><li>・後輩にも自分のような経験をさせたい。</li><li>・自分が教えたゲームを後輩が使ってくれた時は嬉しかった。</li><li>・自分以上のリーダーになってほしいと思いながら後輩を指導している。</li><li>・子ども達と遊んでいると自分のリフレッシュになり、活動が楽しい。</li></ul>

- 同じ区内、市内に仲間がたくさんできた。
- 継続していることで中高生からの信頼や役員の人との関わりを持ち続けられること。
- 活動自体が楽しくて、ずっと参加したい。
- 子ども会活動中だけではなくて、プライベートでも遊べる友達・仲間ができた。
- 子どもとたくさんふれあい、常に初心を忘れることなくできる。
- 毎年参加する子どもが変わるので、毎年研修のカラーが違うのが面白い。
- 一人ひとりと同じ目線に立ち、子どもと関わるようにしている。

#### リーダーをやっていて苦労していること

- 後輩をどう育てていくか。
- 子ども会の活動のために予定を空けることが大変。
- 中間層の学年の人がいなくて、年代が固まっている。
- 講義のやり方が分からない。
- 自分の後を継いでくれるような中高生を育てること。
- 研修会に参加者が集まらない。
- 中高生のジュニアリーダーからシニアリーダーズクラブに入会してくれる人が少ない。
- 後輩が育たない。
- シニアリーダーの人数が増えないので人手不足。
- 子ども的人数に対してリーダーが足りないので、まとめきれない。

#### どのように研修会を継続させてきたのか

- ジュニアリーダーからシニアリーダーに入る人を増やし、学生のシニアリーダーを増やすように努力している（社会人になると仕事が忙しくて時間を工面できなくなるので、活動できる学生を増やしたい）
- 憧れられるような存在になって、後輩に入ってもらおう。
- 先輩たちから引き継いできた。
- より中高生に分かりやすいように心がけている。
- 毎年、年間の研修計画を立てて、月に数回会議をして内容を決めている。
- 募集要項を手作りし、各区に配布して参加者を募って開催している。
- もっとたくさんのジュニアリーダーを集めて、全区が参加して情報交換をしたい。そして、たくさんの情報を持って帰ってよいリーダーになるための通過点にしてほしい。

#### リーダーをやめてしまった例

- 高校時代でやりきった。
- 学校が忙しい
- 他にもっと楽しいことを見つけた。
- バイトが忙しい
- 人間関係
- 仲間同士の考え方の違いで対立した。
- 部活や受験
- 仕事が忙しい
- ジュニアからシニアへつながらない
- 大学生になって地元から引っ越してしまい、活動に参加できなくなった。

## ②宮前市民館「夏休み子どもあそびランド」に参加していた若者へのアンケート結果

子どもあそびランドに関わるようになったきっかけはなんですか？

- 学校でボランティアの募集を見たので申し込みました（2人）
- 学校の宿題でボランティア活動をしなればいけなかったから（4人）
- 大学での単位を得るため。
- ホームページを見て興味を持った（4人）
- ボランティアをしたかったから（2人）
- 広告を見たから（2人）
- 子ども達と関わりたかったから。
- 子どもが好きだから。
- 学校の夏休みの課題として奉仕活動を行うものがあり、ホームページでこのボランティアを発見し、興味がわいたから。
- ボランティアをしてみたかったし、宿題だった。
- 楽しそうだったから。
- 友人に誘われたから。
- ボランティアをやりたいと思っていて、インターネットで探していたところ、見つけました。
- 「かわさきキャラ着ぐるみ隊」活動の一環として（2人）  
※かわさきキャラ着ぐるみ隊：平成24年度に宮前市民館のエンパワーメント研修で、宮前区のキャラクター「みやまえメロン」の着ぐるみに入るボランティアを育成した。その参加者が結成したグループで、「みやまえメロン」に限らず、イベント等で様々なキャラクターの着ぐるみに入る活動をしている。
- 学校の課題のためにボランティアを探していたところ、市民館でチラシを見つけて申し込みました。

この事業に関わり初めて何年ですか？

- 今年が初めて（21人）
- 今年で2回目（2人）
- 市民館事業に参加し始めて1年。

参加して、良かったことは何ですか？

- 色々な人と関わることができた（2人）
- たくさんの子ども達と触れ合うことができて、楽しかった（7人）
- 貴重な体験ができた。
- 友達ができた（2人）
- 小さい子が喜んで見られて嬉しかった（2人）
- 子どもと触れ合うことがなかなかないので、ボランティアを通して、子どもとの接し方が分かりました。
- ボランティアをして良かったと思っています。
- 子どもと多くふれ合えたので、とても楽しかったです。子どもの楽しそうな姿をみて、やってよかったなと思えました。
- 子ども達が笑顔で楽しんでいるのが何よりです。
- 子どもや地域の人々と交流ができた。
- 幅広い年代の人と触れ合えたこと。（2人）

- 学校では話すことがないような年齢の人と話せた。
- 小さい子どもが好きなので、すごく楽しい1日を過ごせました。
- 楽しかった。

大変だったことや、困ったことはありますか？

- 初めてだったので分からないことが多かった。
- ご飯を食べる時間があまりなかった（2人）
- ゲームが難しくて泣いてしまう子どもがいた。
- 準備ができていないのにゲームを始めてしまう子どもがいた。
- 人が多かった（2人）
- 思っていた以上に忙しい。
- 子どもが泣いてしまった時が大変でした。
- 子どもが意外と多かったので、忙しかったです。
- より子ども達を楽しませるための工夫を考えるのが大変でした。
- 参加者への説明が難しかった（2人）
- 小さな子どもに視線の高さを合わせること。ルールを守らない人。
- 行列ができてしまった時の対応が少し大変でした。
- 湿度が高くて暑かった。缶バッチのコーナーをやっていたが、材料がすぐになくなってしまった。
- 氷の片付けが大変でした（2人）

地元はどこですか？

- 多摩区（2人）
- 麻生区
- 宮前区（14人）
- 宮前区以外（7人）

今後も、市民館事業や地域の活動に参加したいと思いませんか？

- ぜひ参加したい（5人）
- 参加したい（8人）
- 機会があればやりたい（2人）
- 時間があればやりたい（2人）
- 来年もあれば、ぜひ参加したいなと思っています。今年の反省点を改善できるようにしたいと思います。
- 子ども達が喜ぶので、もっと着ぐるみを出したい。
- いいえ（1人）

平成 24・25 年度社会教育委員会議委員名簿

平成 24 年 5 月 1 日委嘱

役 職	氏 名	役 職 名
	かわさき ひとし 川 崎 等	市立新城小学校長 (～平成 25 年 3 月 31 日)
	すずき しんいちろう 鈴 木 信 一 郎	市立土橋小学校長 (平成 25 年 4 月 1 日～)
	もりや なおみ 森 屋 直 美	市立御幸中学校長 (～平成 25 年 3 月 31 日)
	おおつか かずこ 大 塚 和 子	市立住吉中学校長 (平成 25 年 4 月 1 日～)
	みやづ けんいち 宮 津 健 一	市立川崎高等学校長
	おぼら りょう 小 原 良	市 P T A 連絡協議会会長
	かどくら しんじ 門 倉 慎 児	川崎地域連合副議長
	しろたに まもる 城 谷 護	市総合文化団体連絡会理事
	すずき たかお 鈴 木 孝 雄	(公財) 市スポーツ協会監事
	なかじま じゅんこ 中 島 順 子	市地域女性連絡協議会書記
	ふるや きんじ 古 谷 欣 治	市全町内会連合会理事
	まちだ まさふみ 町 田 順 文	(公財) 市幼稚園協会理事 (子育て支援部長)
	よしい いさむ 吉 井 勇	市青少年育成連盟副理事長
	しのざわ せいこ 篠 澤 惺 子	市民委員
	みやこし たかお 宮 越 隆 夫	市民委員
	ありきた いくこ 有 北 いくこ	NPO 法人 ままとんきつず代表
	うえだ ゆきお 上 田 幸 夫	日本体育大学体育学部教授
議 長	おおした かつみ 大 下 勝 巳	NPO 法人 かわさき創造プロジェクト代表理事
	どうまえ まさし 堂 前 雅 史	和光大学現代人間学部教授
	ふじわら りょういち 藤 原 亮 一	田園調布学園大学人間福祉学部教授
	ますぶち そういち 増 淵 宗 一	日本女子大学名誉教授 文化ファッション大学院大学講師
副議長	よしかわ れいこ 芳 川 玲 子	東海大学文学部教授

平成 24・25 年度社会教育委員会議 審議等経過

月 日	会 議 名	議 題
平成 24 年 5 月 28 日	第 1 回 定例会	委嘱状交付 議長、副議長の選出 今後の定例会等について 今後の会議の進め方・内容・日程について
6 月 16 日	神奈川県 社会教育委員 連絡協議会総会	活動報告 活動計画 講演（社会教育委員の活動について）
6 月 21 日	指定都市 社会教育委員 連絡協議会	各都市提出協議題について
7 月 17 日	第 2 回 定例会	県社会教育委員連絡協議会総会について 社会教育委員の役割・活動について（学習会）
9 月 18 日	第 3 回 定例会	神奈川県社会教育委員連絡協議会研修会について 今期の社会教育委員会議 研究課題について
10 月 29 日	第 4 回 定例会	全国社会教育研究大会（山梨大会）について 県社会教育委員連絡協議会地区研究会について 研究課題・協議テーマについて
10 月 25 日 ～26 日	全国（関東甲信越静） 社会教育研究大会	第4分科会にて 22・23年度研究内容報告「地域に広がる教育力の再発見―川崎における子育て世代への支援―」
12 月 6 日	第 5 回 定例会	教育委員との懇談について 研究テーマについて
平成 25 年 1 月 17 日	第 6 回 定例会	新中原図書館の会館について 県社会教育委員連絡協議会地区研究会について 研究テーマについて
1 月 22 日	教育委員との 懇談会	「つながり」をキーワードとする今期研究について、 つながりの回復、新しいつながりを紡ぐために等 自由な討論と意見交換
2 月 18 日	第 7 回 定例会	平成25年度生涯学習推進活動方針について 今期社会教育委員会議の調査・協議について
3 月 26 日	第 8 回 定例会	平成 25 年度社会教育関係団体への補助金交付について 平成 25 年度生涯学習推進活動方針について 今期社会教育委員会議の調査・協議について
4 月 30 日	第 9 回 定例会	平成25年度社会教育関係事業予算について 県社会教育委員連絡協議会総会および研修会等について 今期社会教育委員会議の調査・協議について

月日	会議名	議題
6月3日	第1回 定例会	指定都市社会教育委員連絡協議会について 県社会教育委員連絡協議会総会について グループ別協議
6月20日	神奈川県 社会教育委員 連絡協議会総会	活動報告 活動計画 講話「生涯学習・社会教育におけるこれからの展望・課題」
7月29日	第2回 定例会	県社会教育委員連絡協議会研修会について グループ別協議
8月30日	第3回 定例会	関東甲信越静社会教育研究大会について 各グループ協議の中間報告 今後の作業スケジュールについて
10月1日	正副議長会議	これまでの協議のまとめ 今後の研究の進め方について
10月15日	第4回 定例会	県社会教育委員連絡協議会地区研究会について 今期の研究 グループ別協議
11月14日 ～15日	関東甲信越静 社会教育研究大会	記念講演 パネルディスカッション
11月25日	編集会議	今期研究の取りまとめについて 今後のスケジュールについて
12月11日	第5回 定例会	教育委員との懇談会について 今期の研究内容のとりまとめについて
平成26年 1月17日	編集会議	グループ別協議のまとめ 今期研究のまとめ方について
1月23日	第6回 定例会	県社会教育委員連絡協議会地区研究大会について 今期の研究内容について 平成26年度生涯学習推進活動方針について
1月28日	教育委員との 懇談会	今期社会教育委員会議の研究内容「若者」「つながり」「社会教育施設・事業の役割」について教育委員との意見交換
2月20日	第7回 定例会	平成26年度政令指定都市社会教育委員連絡協議会協議題 に対する回答について 平成26年度生涯学習推進活動方針について 今期研究の取りまとめについて
3月13日	編集会議	報告書（提言）のまとめ方および文章整理について
3月24日	第8回 定例会	平成26年度社会教育関係団体補助金交付について 研究報告書について
4月15日	第9回 定例会	平成26年度生涯学習推進活動方針について報告 教育委員会への研究報告について

平成 24・25 年度 川崎市社会教育委員会議研究報告書

「現代の若者と地域社会のつながり」

—川崎の社会教育は何ができるか—

平成 26(2014)年 3 月 発行

問い合わせ先

川崎市教育委員会 生涯学習部 生涯学習推進課

川崎市川崎区宮本町 6 電話：044(200)3303

E-mail：88syogai@city.kawasaki.jp

印刷 株式会社ホクシン